

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 土方久功日記Ⅱ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土方, 久功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001015">https://doi.org/10.15021/00001015</a>

## 土方久功日記 第9冊

1925年11月30日～1926年7月6日（大正14年～15年）

### 解説

第9冊の表紙には、「十一月二十九日ヨリ」と記されているが、29日の記事は第8冊の最後にあり、この第9冊は、11月30日から始まっている。

第9冊で興味深いのは、久功が童話について論じていることである。1925年12月7日から1週間、久功は鎌倉に居た。呑気で気楽で、暇で、こだわりのなかった1週間であった。そんな暇をうまくつぶすために、甥の昌道の本箱をあさって、短編童話集をいくつか読んだ。日記には、『独逸童話集』以下5冊の童話集の題名と短編童話のタイトルが書かれている。単なる暇つぶし以上に、久功は童話に強い関心を持っていたことが分る。そして、久功は、童話について、次のように結論づけている。

さて、この位ひ読んでみると、童話の国にも実に犯し難いマンネリズムが根をはって居るのに驚く。構想に、着意に、概念的なセンチメントに。殊に物足りなく思はれることは、常に幸福と安寧とが最後に常に約束されるばかりであり、その上それらがつねに黄金と王位、爵位、又「幸福に」といふ言葉でのみあることである。これは、作者に自信のある内容がないからではあるまいか。そこに物語られる物語の内容其物が、小さい心に無上の幸福であり、慰安であり得ないといふことは、実に物足りないと思ふ。其故に、童話の国の荒唐無稽が、単に子供だましにのみ止まって、より大きな必然、現実的な真実よりも、一層真実な夢となり得ないのだ。

実に辛辣な批判である。久功は、戦後、1963年から75年の間に、『おおきなぬ〜』等5冊の絵本を描いた。久功にとって童話は単なる余技や思いつきで描いているのではなく、40年もの間考えて続けてきたことを絵本にしたことが、ここからうかがわれる。

日記には、築地小劇場のことがよく出てくる。久功は、ほぼすべての公演を見ている。また、これまで通り、展覧会はよく見ている。

1926年3月31日には、家族、知人等24、5人で二子玉川へピクニックに出かけ、楽しく半日を過ごした。一見、平和な時間が流れているように見える。

4月22日には、再び引っ越しである。引っ越し先はすぐ近くであったが、落ち着いたかない日々がしばらく続く。

5月31日、兄・久俊と小城文子の結婚式があった。小城家とは親戚関係にあり、幼い頃から家族同士頻繁に行き来していた。久功は東京美術学校、文子は東京音楽学校の卒業生で、音楽を好んだ久功は、音楽学校のコンサートへよく出かけた。

結婚式当日の日記には、

今日が、兄の結婚なのです。で、朝九時に皆で、三光教会に行くと、直ぐに式はじまり

とのみ記されている。

その翌々日、久功は、次のような詩を日記に書いている。

彼女は私を愛してくれる  
だが婚姻を結ぼうとはしない  
私は彼女を或はもっと愛し  
而し決して婚姻を結ぼうとは思はない  
彼女は私の彼方に居り  
私は彼女の此方に居る  
若しもここに婚姻が結ばれるなら  
彼女は私の連鎖となり  
私は彼女の一部となるだらう  
彼女は私を愛さなくなり  
彼女は私を愛さないで、私に頼るようになるだらう  
私は彼女を愛さなくなり  
私は最早彼女を愛するのではなくて  
彼女に対する私の感謝は  
毎日の手足に対する如くであらう  
ところでここに多少の疑ひかロマンティシズムがあるにしたって無いにしたって  
ここに多少の誇大かスピリチュアリズムがあるにしたって無いにしたって  
それよりも露骨に負惜しみか<sup>ひがみ</sup>僻がさへあるにしたって無いにしたって  
恐らくこいつは真実の影法師位ひではあるでせうよ  
ヘッ ヘッ

〔表紙〕  
 [9 千九百二十五年十一月二十九日ヨリ 千九百二十六年七月六日迄  
 大正十四年 大正十五年 功 ]

〔見返し〕  
 [×は原稿紙ニ書移シタルモノ]

## 〔11月〕

### 三十日

江波が朝、原瀬の悪いことを知ったのだと云って飛んで来る。午前二人で原瀬の所を見舞ふ。奥サンの話しては、もう全く駄目らしい。実に気の毒だが、こんなひどい脳膜炎では、譬へ命をとりとめ得たとしても、それは却って余りに不幸であるかも知れない。

モルナーの「痴人の愛」を読む。「リリオム」もそうだったが、この人ののは実に甘い。だが、甘ったるいのとは違ふ。「痴人の愛」は、実に美しい物語だ。「リリオム」がより其儘の人間ならば、「痴人の愛」は、幾分物語だ。或は理想的だ。「リリオム」は、もっと親しい。「リリオム」には、不思議な愛と殆ど堪えられない、或は信じられない憎しみとがある。だが又「リリオム」は、そのまま、深い懐しさを持ってゐる。「痴人の愛」は、幾分うまく出来過ぎて居る。だがそれは、ユハズがではなくて、ユハズの愛が説明されて居る所のしくみである。だが又そこには、ユハズの愛には源因らしいものがない。ユハズの愛には、目的らしい目的がない。其故にユハズの愛は底知れず深くなって居る。ユハズの愛には理由がない。ユハズの愛には掟がない。ユハズの愛には教へがない。其故に、それほど純で、それほど清く、それほど真実なのだ。だから、「痴人の愛」がどんなに理想的であっても、どんなにうまく出来過ぎて居ても、嫌味がない、臭味がない、あやうげがない。そして、「痴人の愛」はすばらしくあまい。モルナーの別のあまさは、そして、殊に目立つあまさは幕切れだ。それは又、美しい叙情詩を思はせる活人画の全く別なあまさだ。此の次に読む「白鳥」がどんなだらう。

## 十二月

### 一日

朝石膏屋に行って石膏をとって、江波の所に行く。午後、江波とブロンズ屋に行ったが、一日で休で誰も居ないので三角の家を尋ねたが、留守なので歩いて本郷で別れて帰って来る。

モルナーの白鳥を読んでがっかりする。それは、全く退屈するようなことはなくとも、実の所、期待の半ば以上を裏切られたようだ。こんな風では、第三幕目でも讚めなくては。

まあ、ヘッベルかそんな時代の人でも書きそうな——なる程、お客様は喜びそうだが——

## 二日

ひどい風だ。何でも吹き飛ばす。芥と一緒に、埃と一緒に、思想や意志までも吹き飛ばす。

今日は、今迄造ったものを整理してみる。屑まで入れて三十。これじゃよっぽど奮発しないと、展覧会など出来やしない。

ユウジェーヌ・ブリューの「信仰」を読む。だがこの「信仰」は、先達のローランの「信仰の悲劇」のように、思想的につっこむようなものではない、と同時に、意志したり、主張したり、あらうことか強要するようなものではない。これは気楽で、どちらかと云へば、遊戯的だ。譬へサトニの立場がどんなに同情さるべきものであるにせよ、大祭司と群衆との間にあるものが、どんなにくだらないものであるにせよ、大祭司の不徳が楽々と成功して居るにもせよ、それらは只読者の、又観客の享楽の為の道具であって、何等の思想に対する革命、社会に対する警鐘、群衆に対する啓蒙乃至煽動となるべき毒質或は薬餌をも持つのではない。自分が近頃、沢山に読むカイザー、トルラー、ハーゼンク、レーフェルなど一群とは全く異った仏蘭西的なものかも知れない。これは又、大劇場で美しい効果をあげることが出来るだらう。サトニの為にすばらしい音量と熱とを持った役者を迎へ、ホンモノのような群衆を使って堂々たる合唱的な伴奏としたら、豪華な衣装と道具と、特異な形式——礼法、儀法、習慣とを織りませたら、そりゃきっと美しいものとなるだらう。

## 三日

午後三時に田辺サンに行って、晩御飯を御馳走になってから、子供達と久々で神楽坂を歩いて十時に家に帰ると、留守に江波と三角とが来て居たので、兄と新井の松葉へ行って居るといふので、直ぐに行って逢ふ。

## 四日

午後、江波が弟と二人で来る。原瀬が昨日永眠したことを報らせて。直ぐに江波と一緒に原瀬の所にお悔みに行って来る。

## 五日

三角と約束して居たので、夜、築地にゆく。

## 六日 日曜日

閑かな日だった。午後母と家を出ると、三沢が自分の処を訪ねて来るのに会ったので、一緒に荒井の方を一まはりし、母と別れて三沢をつれて家に帰って来る。三沢は久々でゆっくり九時半過ぎまで遊んでゆく。

今晚八時過ぎ、皇孫、内親王御誕生。

## 十四日

七日の夕方、鎌倉へ行ったら、丁度川上サンの子供がなくなって、昌生叔父様も、梅子叔母様もお留守だった。そして、晩遅く帰られた。

八日には、湯地を訪ねたが、丁度東京に出る日だったので、三十分程して一緒に出た。湯地と別れて、島村サンに行ったが、皆サン留守だった。

十二日に湯地が尋ねてくれたが、丁度午後、昌生叔父様がお客を呼ばれた日だったし、湯地も帰るといふので、其日も三十分か一時間程も話して別れた。

十三日は日曜だったので、秋庭サンが武チャンをつれて見えるし、夕方に譲二叔父様がひょっこり来られた。

で今日午後、電車で藤沢に出て茅ヶ崎に行き、父上のお墓に詣って夕方東京に帰って来る。

鎌倉に居たこの一週間、まるで十月のような閑かな暖かい日が続いて、呑気で気楽で暇で、こだわりがなかった。其処らを散歩したり、ねころんだり、子供と遊んだり、花に水をやったり、夜は晩酌二本でうとうとしたり、まあそんな風なことをして居た。

そんな暇をうまくつぶす為に、昌道の本箱をあさって、肩のこらない、根気のいらない短篇童話集をいくつか読んだ。

「独逸童話集」(甲田正夫訳)

仕立屋のちびさん

なが鼻小人

太陽馬

白蛇

奇妙な兵士

きつねの裁判

魔法の笛

長鼻小人、狐の裁判など、なか〜面白い。それから、

「星の女」(鈴木三重吉編)

星の女(印度)

魔法の指輪 (伊太利)

豆の梯子 (英国)

鷹の騎士 (魯西亜)

お喋婆さん ( ッ )

銀の泉 (イタリー)

星の女は美しく、お喋り婆さんはユーモラスで変ってゐる。

「魔法の小馬」(白鳥省吾)

銀の葉と王様

騎士の最後

いたづら平吉

幸福な蛇

怪僧の罰

小公爵

魔法の子馬

猿の膽

陸上の魚

紅鶴と皇子

人魚の嫁さん

勇助と夢助

言葉だの、話し方などにぎごちないところがあるが、猿の膽などなか〜面白い

「宝の杖、悪魔の杖」(樋口紅陽)

金貨の釜

釣鐘争ひ

宝の杖、悪魔の杖

捨子の王子

新瘤取り

お日様の馬車

鯛の自慢と鮫魚

古城物語

きちがひ婆サン

大盗人様

めくらの兄さん

これは少々雑然として居る。創作があり、編入があり、翻案があり、と云った塩梅で、子供達には同じような価値であるにしても、われ〜にはありがたくない。釣鐘争ひ、宝の杖、悪魔の杖、古城物語などいい。

## 「グリム童話集」(葉多黙太郎訳)

黄金娘と松脂娘  
驢馬と山賊  
浮れ胡弓  
矮人の靴屋  
盗人の腕試  
ミリーと狼  
一寸法師  
ミリーとミリアム  
風来坊  
欲過ぎた鍛冶屋  
黄金城  
狼と山羊  
限りない望み  
姫と蛙  
ヨリンデとヨリンゲル  
兎さんの花嫁  
金の靴  
問援の三平  
樵夫の娘  
お菓子の家  
蜘蛛の火傷  
熊の王子  
妙な名前  
六勇士

これは以前に読んだことがあるので、今度はほんのひろひ読みしただけだった。

さて、この位ひ読んでみると、童話の国にも実に犯し難いマンネリズムが根をはって居るのに驚く。構想に、着意に、概念的なセンチメントに。殊に物足りなく思はれることは、常に幸福と安寧とが最後に常に約束されるばかりであり、その上それらがつねに黄金と王位、爵位、又「幸福に」といふ言葉でのみあることである。これは、作者に自信のある内容がないからではあるまいか。そこに物語られる物語の内容其物が、小さい心に無上の幸福であり、慰安であり得ないといふことは、実に物足りないと思ふ。其故に、童話の国の荒唐無稽が、単に子供だましにのみ止まって、より大きな必然、現実的な真実よりも、一層真実な夢となり得ないのだ。

- ✓冬枯の蓮池に跳ねし真鯉哉
- ✓土手に冬薊の花のすこしかな
- ✓落葉焚くけむりばかりや寺の門

#### 十五日

霜が降って朝が大変に寒く、日があはれっぽく薄いので、そろ—雨でも降るのではないかと心細く、午後田端の倉沢の処を尋ねたが知れず、尋ねあぐんで本郷に出て、二時半に江波の処に行った時には、すっかり空が曇って、雪でも降りたそうだったが、夕食後、江波と一緒に三角を訪ねようと思って出た時には、雲がきれて、なまぬるい風が吹いて居た。三角は留守だったので、再び江波の処に戻って、十時に家に帰って来る。

#### 十六日

午後、三沢の西大久保の家を始めて尋ねる。

#### 十七日

朝っばらから勢よく出かけて歩く。買物ながらではあるけれども、それよりも久々に町の中をぐる—歩いて見るのだ。第一に朝が早いから、お勤人がおしよせる、おしよせる。電車がぎし—こむから面白い。そりや、いつだって電車はこむけれど、疲れきった帰りとちがって、中ぶらりんの用たしとちがって、一日の始めの朝のおでかけだから、其の上、年の暮の風が寒いから、何といったって勢がいい。そりや、半分やけくそだって、或は大かたは無自覚に力に引張られ、引摺りこまれるからだって、兎も角も勢はすさまじく、其の上理由はどっちにしたって、又何にしたってかまはない。新宿から四谷の方に向って歩き出すと、早い店は三文の徳をしようと思って、もうきちんとしてお客を引寄せたげに待って居る。遅い店はまだ戸もあけない。丁度其の間の他の店では、折角今商品を並べて居り、クリスマスと暮と兼帯の飾付けに忙がしく、ここでも朝の番頭さんの無駄声と用弁とがちゃんぼんに勢がいい。赤白の柱列に同じ赤白の幔幕の街飾りが、薄日と北風とを半分半分に、びらびら、ちらちらしてゐる。あひ変わらず、東京の町はあさっばらから、あっちこっちで路を堀<sup>掘</sup>り返してゐる。一膳飯屋に今日一日の勢をつけようと、煙の出る暖かい山盛飯を戴いてゐる若者があり、これはまた、当もなさそうな、ちんばかよいよいか、力ない首を前につき出して、口の中でぶつ—云ひながら、それは宿命に対するあきらめであり、みじめな悲しみであり、不当に対する怒りであり、あふれ者の持ち所のない八当りであるが、それでも何処へか行くらしく、一つ所にちっとしても居ないし、行ったばかりの所に直ぐに帰って来もしないで、やっぱり歩いてゆく、歩いてゆく。そうして自分は四谷見附まで歩いて来る。それから電車に乗って、須田町までゆき、今度は反対に駿河台の方歩いて表神保町をぬけて、九段下に出て、お

昼前に帰って来る。

---

いとも私に近いものらよ  
暫らく、(或はこの意味は永久にかも知れない)  
とまれ暫らく私から遠のき去って貰ひたい  
第一に私の恋人よ、そして又恋よ  
お前とお前の影とよ  
私から遠のき又去って貰ひたい  
次に私の友達とそして又友情よ  
君等と又君等の影よ  
私から遠のき去って貰ひたい  
さていとも懐かしいまやかしもの  
人形よ、仮面よ、更に永い間私に近しさを強ふる  
青銅花瓶の美しい花よ  
私の目の底にこびりついたもろへの形と色  
それが私の命の一つの証拠であった所で  
又それらの崩壊、それらの幻滅が  
私の最後又、私の死に係ってゐた所で  
さていとも慕はしい嘘言者  
君よ、あなたよ、又諸君ならびに奥さん方  
劇場のもろへの場面よ  
詩集と小説と評論と伝記と  
書籍らよ、演説よ、説教よ、罵詈よ  
常に私の耳膜を打ちふるはせる音と声  
音楽よ、鳥らのお喋りと蟲の翅音よ  
それが私の存在の一つの証拠であった所で  
又それらの消滅、それらの否定が  
即ち私の終焉、私の断末魔に係った所で  
え？それが何であらう  
更に形式なる命、息すること  
健康と病弱、官能の動性、感覚の感性  
更に他の半面なる命、心のいのち  
認識と思惟と、未来と希望と  
現実と満足と又不満と

過去と憧憬と又絶望と  
それらあらゆる感情の激越と沈潜  
それらあらゆる理智の賞讃と排斥  
更に理想と智慧とによる超越性  
更に同情と慈悲とによる柔優  
更に信念による神性  
え？ それは何であらう  
(私には一切の事物の相対が堪えられないのですよ)  
其故にいと私に近いものらの総てよ  
暫らく (或はこの意味は永遠にかも知れない)  
私から遠のき又去って貰ひたい  
私は孤独と孤独の存在の意義を知りたい  
私は孤独と孤独のいのちを知り  
孤独なるいのちの意義と価値とを知りたいのだ

[×を附す]

十八日

十月のように暖かいなどと思ったのも此の間のことなのに、東京に帰って二三日、遠に冬になったなどと思って居るうちに、今日は又今日は又恐ろしく冷たい北風、雪の上を吹いて来る風だって、こんなに痛くはないと思はれるような北風で、空気が乾いて冷たくて、鼻の先が、手の先が、頭の先がひりひりと痛い。朝のうちに新井の方に買物に出たが、その冷たいつらな。晩にはそんなに寒いのに、築地に出かけてゆく。

メーテルリンクの「青い鳥」<sup>55)</sup>だ。「青い鳥」、ずっと前、有楽座で見たことがあった。さう、ずっと前、私が芝居を見出したはじめの頃、チルチルを水谷八重子がやって、ミチルがたしか夏川静江だったと思ふから、何でもまる七年も前のことではないかしら。

確か其の時分には、「鬪入者」「モンナ・ヴンナ」と、それからわけのわからない「群盲」などを読んで知って居た。それから引つづいて「青い鳥」「内部」「タンタヂールの死」「婚約」「七女王」「ベレアスとメリサンド」などと二三年の間読んだり思ひ出したりした。その頃にはもう、手あたり次第に読みはじめて居た。ゲーテ、ヘッベル、<sup>[ママ]</sup>イブセン、チェホフ、秋田雨雀など、一番沢山読んだ。それから、アイルランドの一群、ダンセニイ、グレゴリー、シング、イーツ、など、それからワイルドでもトルストイでも、シュニッツラーでも、ヴェデキンドでも、有嶋武郎でも、倉田百三でも、長与善郎でも、菊池寛でも、武者小路実篤でも、ビヨルンソンでも、ゴールキイ、ゴーゴリ、ハウプトマン、タゴール、ホフマンスタール、シェイクスピア、ゾーダーマン、カーリ・ダーサなどでも、全く手あたり次第に読んだ。その人々の中から、アンドレーエフとショウと、そし

てストリンデルヒトが残って、その後、といふよりそのかたはらにあらはれたのが、カイザー、ハーゼンクレーフェル、モルナー、ツァペク、ピランデルロ、トルラーなどで、そして現在御覧の通りといふ所だ。そこで大変簡単だったが、これで「青い鳥」が自分にとってどんなに過去のものだか、又どんなに懐かしいものか（全く傑作だから）がわかった。今度は、五時に暮が開いて居るのをうっかりして居たので、妖女の御殿の場があいて居た。だんだんに芝居が進んで行った。誰が何をやって居たってかまはなかった。スウェデンボルグの「神秘」が「暗号」が、何処まで影響して居たって居なくたって、青い鳥そのものが自分にとって何んなものであるたって、ないたってかまはなかった。そこには懐かしいチルチルとミチルと、懐かしい犬と猫と、懐かしいおちいさん、おばあさのチル、懐かしいお砂糖とパンと、懐かしい思出の国と、森と未来の王国と、目醒とがあった。さうさう、ああだった、あんな風だったと思った。おやあんなだったかな。いや、やっぱりそうだった。そうそう、いや、あんな所があったっけか。まるで忘れて居た。フフン、やっとる、やっとる。ほら、犬がここでしばられるんだぞ、馬鹿だなあ、なに、だが今にあぶない時に犬が葛を食ひきって出てくるし、其上うまい時に光がちゃんと来るんだからな。さあ、いよいよ隣りの婆さんが鳩を貰って帰った。ここで奇蹟が現はれる、隣りの娘、どんな綺麗な娘が出てくるだらう、おやおや、そりゃ可愛いには可愛いけど、こりゃ俺もあんまり長いことたち過ぎたので、いたづらな記憶に一ぱいくはされたか、ウフ、全く夢はいつでも少しばかり綺麗過ぎるて。そんな風に思っ、私は懐しいものの中に懐しく浸って居た。

ちゃ、此の次に逢ふ時まで、さようなら「青い鳥」。

十九日

二十日 日曜日

風がなくて暖かい。田辺サンが来られる。午後、佑サン、英子サン、久顕サンと銀座にゆく。暮で日曜で天気がいいから、それはもう大変な人出だ。帰って、佑サンの所で、皆で一緒に夕食を食べる。

二十一日

昨夜遅く降り出した雨が夜中降って、今日は久しぶりにひどい雨だ。日暮前に止んで薄日がさしたが、夜はそのかほりに風が〔吹力〕降り出して、夜中までひどい風だ。

二十二日

引続き風はひどいけれど、冷たくはない。午後、遠山サンを御見舞する。非常にお悪いようなこともないらしいが、非常にいいとは云へない。床には勿論ついて居られるし、此の一週間程は、幾分熱も高いように云って居られる。一時間余もお話してお暇して、

小城サンに行く。

二十三日

朝のうちに原瀬の奥サンの所へ見舞かたへに、借りた本など<sup>(返)</sup>帰しに行く。  
夕方、澄ちゃんが来て宿る。夜、すみちゃんが来て宿る。

二十四日

朝のうちに、すみちゃんは帰る。午後、松平に行って払ひをすませ、江波の処へ廻ったが、病気で寝て居るので、上らずに夕方帰って来る。

二十五日

午後、三沢が来て、夕方まで居る。

二十六日

夕方から少しばかり人が来る筈だった。兄の主催で、佑さんの処の総勢と文ちゃんとお隣りのミツチャンが来る筈だったが、佑サンとミツチャンは風邪の為に来ず、教会の兄の友達、ヒナタサンが一人見えた。文ちゃんも病気で来ない。田辺の英サンがひょっこり来たので引止めて、十時頃まで遊ばせる。

二十七日 日曜日

今日は、小城サンに呼ばれて居たので、午後出かけようとする、澄子から葉書で二十九日に延ばしたことを知らせてきたので、久顕サンと東京駅に出、銀座をぶらへ歩いて、築地を見ようなど相談して居ると、丁度偶然<sup>(土方与志)</sup>、久敬に逢ったので、一緒に築地にゆく。帰りも田村などと銀座に出て、十二時過ぎて家に帰る。夜雨。銀座で室田サンとソソチャンに逢った。君ちゃんが女の子を産んだと。

二十八日

雨が降るでもなく、暗く霏が深くじっとり湿って暖かい。夕方から久顕サンと上原サンにゆく。江波から葉書が来る。  
「九度からの発熱で全くピッシャンコ、すっかり昨今ではやせ衰へた、あんなにやせて、まだやせるかと不思議がるな」と。全くだ。

- ✓ 常さへに真竹なす<sup>やせを</sup>瘠男いややにやせたりと聞く春木町人
- ✓ 瘠身には冬ぞ寒きを病みこやり氷雨降れば不<sup>さぶ</sup>楽しけむかも

三沢から葉書で又々花可留多を挑んでくる。

✓否と云へどひるまず寛が強ひ可留多ひるまばこそそこしよろしも

### 二十九日

半日どんよりと曇って居たが、午後からは薄日がさす。南風でぬくぬくするような日。午後、昌生叔父様が来られる。夕方から小城サンに行く。沢山の人が既に集って居た。遠山サンの姉サンが遠山サンの赤ちゃんをつれて、それから澄ちゃんの友達、タカザワサン、いそちゃん、さよ子さん？ それからもう一人、それから橋口のケンチャン、雪チャン、中山サンの奥サンといふ人が小さな子を三人つれて来られるし、梅村サンの二子サン達、遅れて中井の良サンが来た。讚美歌の合唱、賑やかな御飯、クワルテットから踊ったり跳ねたりまでして、十時に自分は良サンとタカザワサンと一緒に先に帰る。タカザワサンと別れて、良サンと渋谷で降りて、ビールを飲んで暫らく話し、別れて十二時過ぎに家に帰る。

### 三十日

午前に三沢を尋ねて家に引張ってくる。

### 三十一日

<sup>〔日脱カ〕</sup>  
大晦と云ったって何のこともない。夜、久顕が鎌倉から帰ったので、酒呑みに出て遅く帰る。

(ハッハッハ、夢のような、夢のような、ハッハッ)

今朝の朝の小庭の霜のあらはにも更にがも見も妹が心を

[2 頁白紙]

## 大正十五年正月

### 六日

一日の午後、鎌倉に行った。暖かで静かで、いい元日だった。夕方、讓二叔父様が英昌をつれて来られた。

二日は風が荒々しく吹いた。けれど寒くはなかった。終日落着いて閑かだった。晩は昌生叔父様、讓二叔父様と三人で島村さんに行き、晩飯後一時前まで皆で花を引いて賑やかだった。三日の午後、自分は東京に帰った。夕方小石川へ行ったが、お留守なので田辺サンにまはって、十二時前まで御馳走になったり、喋ったりして居る。

三日の寒さと云ったら恐ろしかった。四日は午後から小城サンに行った。四日も花か

るたで、十二時半過ぎて家にかへった。

五日に中沢さんでお昼を御馳走になって、ここでも少しばかり花かるたをして、夕方上原サンに行った。孝雄は留守で、はあちゃんは風邪を引いて居た。ここでもトランプと花で十一時を過ごした。此の正月はどこでもここでも花ふだにぶつかった。

さて、恐ろしくよく遊びまはった。だが又その間には、「四日」があった。「四日」といふ日には、何やら残忍なものがある。それは明らかに三日に連続して来るからかも知れない。だが或は、そんなことには何等の関係がないのかも知れない。其上自分が心配するのは、「三日」であるかも知れないし、又、「五日」であるのかもしれない。だが又それが「三日」だって「五日」だって、何のかかりがある訳はないのだ。只自分がいつだって明らかに思ひあたる部分画があるのだ。それは、殆ど暗誦することが出来る程懐かしいものであり、同時に自分の不可解な心配の源泉であると信ずる故に、自分が此上なく憎んで居る思想の断片である。

では、退屈でなかったら、聞くがいい。

『一体私といふ人間の運命の中には、何やらアルコール的なものがあるんです！ 何で時にウオトカの一杯位飲んでいけないことがありますか！ して若し一杯飲んだなら、何で二杯三杯十杯飲んでいけないってことがあるんです！ して又何で一斗の酒、酒蔵全部を飲まんといふことがありますか？ 其処に何やらアルコール的なものがあるんです！

その源因も亦沢山あります。「彼女が逢ひに来なかった」といふのも一例です。お、諸君、あなた方は何時か「彼女が来なかった」時の此の心持を、巨細に経験したことがありますか！ 男は喜び勇んで会ひにゆきます。彼女の歩き振りや着物や顔や眼や髪などを想像に描きます……処が彼女は来て居りません。処で、彼は長い間並木道を逍遙します。恰も漫然たる自然美の好愛者のような振りをして、時には立止って何かを観察したり、口笛を吹いたり、腰かけたりします。それからまた歩き出します。そして、又腰かけます……半時間経ちます。一時間、一時間半、二時間経ちます！ それでも「来ません」！ 其時彼は、彼女の家の方に行きます。そして歩道を歩きます。それから、トウンバに腰掛けて、灯のさして居る窓に見入ります。併し家へは這入れません。彼はトウンバに腰かけて、会見に遅れて、若しや彼女が出て来はしないかと待つて居ります。併し誰も出て来ません。窓は明るくて、其処に何やら影が映ります。ピアノの音が静かに聞えます……其処は愉快そうです、暖かそうです、気持よさそうです、其処に他の人々と「彼女」とが一所に居ります！

そして、彼女は当然愉快を感じて居ます。彼女は出て来ません。彼女は忘れました。ハッハッハッ！ 「忘れました」！ ハッハッハッ！ 男はかうして窓の灯が消えるまで、永い間トウンバに腰掛けて居ます。窓が暗くなった時、彼は以前の場所へ、即ち闇い並木道へ行きます。そして、若しや彼女が来て居はしないかと見ます。多分彼女は思ひ出して来たらうと考へるのですが、其処は真暗で人影がありません！ 誰も居りません！

彼は長い間ベンチに腰かけて、そして泣きます。それから、酒場へ行きます。食卓に着いて一瓶を命じます。するとすぐ彼の処へ「アルコール君」が寄り添って来るのです。彼等は飲み且つ考へ<sup>ます</sup>□□込みます。何故彼女は来なかったか。彼女を忘れてしまふことは出来ないか。彼女の可愛い姿が酒の気の中に消えうせぬものかと考へます。酒の気は濃くなって、霧のように瓶の上に舞ひます。併し瓶からは、酒の気からは、彼女の可愛い姿が彷彿として現はれます……ヘッヘッ！ 彼女の可愛い詩的な姿が！ ヘッヘッ！』

『美男子だと君は云ふのか？ 女に好かれるだらうと君は考へるんだね？ ヘッヘッヘッ！ 処が中々だ。君、僕は唯第一印象を与へるに過ぎないんだ。やがて女が僕の美に馴れて了ふと、彼等は直きに僕の哲学に当てられてしまふんだ。神、悪魔、人間、自然、永久そして無限——之が僕の第一の親友なんだ。処が女に取って、是等のものは堪えられない退屈なんだ。此処にも矢張り、兄弟、アルコール的なものが存在するのだ。ねえ君、若し僕が本当の美男子に於て見る如く、も少し馬鹿だったら、恐らく多くの心臓を打ち砕いたであらうし、その代り女も僕を撫悩ましたことだらう！ ヘッヘッヘッ！ 勿論僕の方からは、まるで気のない女にさへ、時として好かれることもあるが、此処に一人僕自身が愛する女があるんだ。併も彼女に対して、遂ぞ成功を持ち得ないのだ。彼女に近づく事さへ、僕は出来ないのだ。

彼女はまた、僕の所まで降りて来ることが出来ないのだ！ 之は僕が今結婚しようとして居る其の女ではない、他の女だ。否寧ろ初恋の女だ。実際これが僕を鎖に繋ぎつけて居る。之が為には僕は猿の如くに踊り舞ひ、とんぼ返りをし、芸当をさへ演ずるのだ！ ヘッヘッヘッ！ あゝ、愛する兄弟、僕の話信じて呉れ給へ、之にも何やらアルコール的なものがあるのだ！』

今日は、田辺サンの子供達と呼んであったので、午後、英サンと国サンと二人でやって来て、遅く十二時過ぎまで遊んで行った。

#### 七日

午後三時過ぎて、建島先生の処へ行く。丁度偶然今日先生の処で、お弟子達の新年の集りがあったので、久々で色々な人に逢ふことが出来た。柴田桂華氏も来られた。木内五郎、倉沢量世、足立貫一、木村石五郎、服部仁三郎など、十四五人程も集ってゐた。

江波から「正覚坊酒呑童子もそっちのけの君の事だから、大いに赤くなったことと思ふ。うらやましくないぞ。遊びにやって来給へ。」と

✓来よとふをゆかずかあらん正覚坊酒呑童子に酒そなへ給へ

#### 八日

午後、三沢を尋ね、一緒に江波を尋ねたが、丁度自分の処へ出かけた留守だった。又

丁度そこへ江波から電話で、今中野に居るとの事なので、そのまゝ待たせて、三沢と中野に帰って来る。途で一升壺を買ってさげて帰り、夕方から兄と弟もまぜて五人で花を引く。それから十時前、三沢と江波と三人で外へ出、久々で江波がすっかり酔ってしまったので、夜中の二時過ぎで、三人で又舞ひ戻って来る。

#### 九日

九時頃になって起きだして、みんな幾分か二日酔ひで、ごろごろ日向で話して居ると、江波の弟が様子を見ながら迎へに来る。三時頃から、今度は江波と一緒に兄と弟と三人で、江波の処に押しかけ、晩飯を御馳走になって、十二時過ぎて家に帰る。

#### 十日 日曜日

夜、築地にゆく。出物は「ゼニスの商人」<sup>56)</sup>

千田是也のアントニオが、しょっぱなから最後まで、この芝居を立派なファースにした。

島田敬一のランセロット・ゴボー、伊達信のモロッコの貴族と黒坊の子供達、山本、岸のポーシャとネリサ、皆で此の芝居を立派なファースにした。

それよりも、人工的な筋と馬鹿げたセリフとで、シェイクスピア自身が此の芝居を立派なファースにした。

だが又、シェイクスピアは彼のあまりの才智と流達から、人物と人物の間に、事件から事件の間に、セリフからセリフの間に、必然性を置き忘れた。そしてそのかはりに少しばかりの無駄か、或は少しばかり度の過ぎた馬鹿らしさを置いた。

斯ういふものを演ずるべく、一般に役者が下手過ぎた。人物と人物の間に、事件から事件の間に、セリフからセリフの間に、必然性が欠けた。散漫な物足りなさがあった。(これは、あまりにも簡単な能舞式ステイヂ、セリフの過重□□時代に書かれた脚本と現代劇場舞台形式との間の、逃れることの出来ないギャップではある) 役者の技巧的なヤマがあまりに簡単に見え透いた。

だが又セリフ自身が、役者のしぐさ乃至解釈が、筋の馬鹿らしさ、見え透いたトリックが、更に役者の下手さが、積み上り盛り上って人々を笑はせた。

此の中に投げ出されたシャイロックこそは、憎々しいシャイロックこそは、寧ろ正に同情せらるべきである。即ち作者の投げたヤマが、ここに於て見事にはづれたと見るべきか、或はそれこそは作者の投げた二重の毘だったのか。

最後にマルタン棒システムの舞台装置<sup>57)</sup>は、驚くべき巧妙なものであり、立派なものだった。

十一日

午後、一寸原瀬の奥サンの処へ行つて、本を借りてくる。上天続きの昼間の暖かさにかへて、此の四五日の夜の冷えはたまらない。

---

木の下  
軒の下  
日の下  
夜の闇  
怪しく柔らかい蔭に居て  
彼は黙つて居る  
私は全く彼を知らないから  
ひそかに彼を敬まつてそこを通る  
彼は黙つて居る  
私は彼を知る由もないから  
会釈するまでもなく尻目にかけて通る  
彼は黙つて居る  
私は決して彼を知ることがないのだらうか？  
私は何処かに悲しみの漾ふような気がする  
彼は黙つて居る  
だが若し彼の方で私を見知ってくれるなら！  
ほのかな希望が私に来る  
彼は益々黙つてゐる  
彼は益々私を引つけるから  
私は彼を憎む  
憎む！  
木の下に  
軒の下に  
日の下に  
夜の闇に  
怪しく冷たい蔭に居て  
彼は黙つて居る  
夢ではないのか  
夢ではない  
捨てることは出来ないのか

捨てることは出来ない

私は決して彼を知ることが出来ないから

私は恐ろしくなる

私は恐ろしくなる

私は黙ってる

十二日

午後、神田に出る。吉田の謙ちゃん<sup>[ママ]</sup>の会ふ約束だったので築地に行ったが、夜まで待っても謙ちゃんが来ないので、明日行くことにして帰る。

十三日

晩、築地に行ってくる。上野まで行ってヴォルテールの小さな胸像を買って来たり、たり、たり、たり、いつもこんなことだ。

十四日

朝から一日かかって、ぼつぼつヴォルテールの胸像を造る。本田サンが来られ、兄が留守だったので、自分が暫らく相手をする。夜、石膏屋へ行く。

十五日

雲が多い。あんまり永く天気が続いた。雨か雪でも降らなければいいが。朝のうちに、小さなゴーガンの伝記を読む。懐かしいゴーガン。自分が最初に好きになったのはゴーガンだった。其頃から自分は理智的だった。今でも益々理智的であり、其上現実的には虚無的だ。其れだのに、ゴーガンの幻想的なものは、ひどく私を引つける。ノア・ノアは古くに読んだ。地震で焼いてから再び新らしいのを買った程、ノア・ノアは私に懐かしい。ゴーガンの手紙も亦三年かもっと前、繰返して読んだものである。セザンヌ、ロダン、ゴッホなどには、好きなものもあると同時に、何ともないものが数多くある。殊にロダンなどは、どうも反感の方が大きい。

ところが、ゴーギャン<sup>[ママ]</sup>は全く不思議な程に親しい。全くこれは不思議だと云へるかも知れない。或は又、別段の不思議でないかも知れない。何故なら、私はピカソやカンディンスキーやアーキペンコに就いては常に知り度いと望み、ぼつぼつ機会をつかまへては来たが、真似ようとも願はないし、羨ましいとも思はない。所がゴーガンに就いては、全く反対に、出来得れば真似たい程にも思ひ、羨やましくもあり、懐かしくもありながら、つまりはどうにもならない事を感じるばかりだからである。

夜になって、私はピカソの小さな伝記をも読んだ。

ピカソ、ピカソ、ピカソ。非常に浸酔すると云はないまでも、彼の自由と積極

は私に大きな慰めである。其上ピカッソに関連して説かれたおなじみの、あの短かかった併し強力な、ラ・フォーヴ。私が私の最初の展覧会の前に是非書き度いと願って居たのは、「永遠のラ・フォーヴ、決して老ひざる、常に若者なるラ・フォーヴの為に」何等か言って置かうことであつた。何故ここに描かれたラ・フォーヴの「勢」は、私にとつても勢のいいものだった。

扱てピカッソは云ふ。「私は、私が絵画で使つた様式に於て、根本的に異つた要求を用ゐたとは信じない。私が表現したいと欲した物が、異つた表現様式を暗示するならば、私はそれを採用するのに、決して遲疑する所なかつた。私が云ふべき何物かを持った時には何時でも、それが云はれなければならないと自分が感じた様式で、私はそれを云つた。異つた動機は必然的に、異つた表現様式を要求する。それは、進化や発展を意味するのではなくて、人が表現したいと欲する觀念とその觀念を表現する方法との適合である。過渡の芸術と云ふものは存在しない!」

ゴーガンは云ふ。「御承知の如く多くの人達が私の個性に負ふ所が多いと云つて居るが、私自身かかるものを持ってゐないのである。また若しあつても、それを立証することは出来ない。私は自分の好むように描くので、今日明るく描くかと思へば、<sup>昨日</sup>□□明日は暗くといった風である。画家は自由でなければならない。だが貴方には技巧があるでせう? と云ふ。ところが私はそれもない。あつてもそれは不定なものであつて、また非常に融通のきくものだ。絶えず私の浴してゐるムードを変へるものが技巧である。で私は、自分の思想を現はす為に、それを使ふ。但し自然の表面を本当らしく表現しないようにである。美しい作品を作る秘訣があるでせう? といふ間に接するが、もう此の答は何度も繰り返した。私は氣まぐれ者だ!」

これを自己弁解乃至卑劣なる逃口上だと云ふ奴があつたなら、彼こそは自ら縛して自らいぢけ、自らひがむ者である。

簡単な見えすいた徹底は、吐気を催させる。

十六日

朝から静かに曇つて寒い。朝のうちに銀座の松坂屋に、黄人社の展覧会に出品する為に、古い小さいブロンズ三点を持ってゆく。帰りに三沢を尋ねたが留守。

三沢から第四番目の版画が送られる。

(三沢の版画に送る小さな詩)

男が二人

女が一人

柳の木の下のトウンバ

夏の真昼

あたりが益々暑いからここは益々涼しいのだ

水郷の——それは土浦の古い町の  
蟬の音が益々高いから真昼は益々静寂である  
家々の強い光と強い蔭との総和——黒！  
黒の中に決して隠れることの出来ない白  
龐大な四角い白亜の異人館  
男二人  
女一人に  
ここに吹く涼風と  
かしこの町  
光と蔭との黒  
異人館に燃える光とは  
おゝ、何といふ対立だ、並行だ、没交渉だ！  
否、それらはここに入乱れて整然として居る  
白と黒、黒と白  
全き客体の中に漾ふ情緒  
甘やかな情緒の彼方に動かざる実在  
関心と無関心との交錯  
方解石の底にひそめる一にして二、二にして一なる  
魔！  
おゝ、怪しげな、怪しげな黒と黒と白と……

十七日 日曜日

朝石膏屋が来て、ヴォルテールをやってくれる。今日は築地〔小城〕に澄子をつれて行ってやる約束をして置いたので、築地に行って待ってゐる。「狼」だ。帰り松坂屋の黄人社の展覧会を見て、夕方澄子を送って目黒にゆく。兄が来たので、一緒に十時頃帰って来る。

十九日

三四日前から怪しげだった天気、とうとう雨になる。なまぬるい風が春のように吹いたり、それもつかのまで、今度は北風の寒い奴がひよーと吹いたり、雨が上って薄日がさしたり降ったり、烈しく降ったり止んだり。朝の間に松平に行って、ヴォルテールを持って築地に置いてくる。

二十一日

天気はすぐに直った。昨日も終日家に居た。今日も一日家に居る。午後、三沢が来てくれたが、一時間も居て帰ってしまふ。

二十二日

日暮前、母と青山に柴山家のお墓詣りをして、母と別れ自分は銀座に出、<sup>[屋脱カ]</sup>松坂に寄って黄人社の出品物をとって帰る。

二十三日

昼間のうちに石膏屋が来て、型をとって行ってくれる。佑サンの艦隊が近日出航するので、皆で一緒に晚餐をとる。丁度三角が来たので、十時過ぎまで花かるたなどして遊ぶ。

<sup>[欄外に記す]</sup>  
[(懷疑は魔法の馬である)]

先づ生と死とは明らかに区別されねばならない  
 死は神聖にして清浄  
 死は絶対である  
 死はそれ自身の本質として無苦にして無患  
 死は常住の無であり、不変の空である  
 生は  
 譬へ有終にして死につらなり  
 有限の中に変転するにも拘らず  
 否、それ故に生は又立派にそれ自身の本質を持ち  
 而も又生は  
 譬へ何やら偶然的であるとは云へ  
 これは又明らかな事実である  
 それ故に生にあって生くる者よ  
 生はそれ自身の本質として有感にして有情  
 成長と云ひ衰退と呼ばれるにしても  
 時間の中に限りなき変転であり  
 空間の中に限りなき多角である  
 変転はそれ自身の本質として決して止まるべきでない故に  
 多角はそれ自身の本質として絶対に多角的であるべき故に  
 更に希望はそれ自身の本質として、こぼたれ又満足する筈がない故に  
 完成は最後であり  
 常住は死である  
 そこに完成の苦があり常住の患があるならば  
 それが常住の樂であり完成の喜であるにした所で  
 さて生に在って生くる者よ

それら完成は、常住は  
変遷であり、多岐である所の  
官能の静止、思想の固定を許さない生の本質に相反する罰として  
死に劣り  
死よりも一層悪いものとなる  
それならば譬へば一つの思想  
一つの定説  
(それらは生の本質に悖る)  
そんなものは決して完成され、固定されてはならない!

だからだ  
それが何だ  
それが何だ  
懷疑だ  
懷疑は御伽話の  
毛むくぢゃらの山羊の腹に住む  
永遠の雌鶏の胃袋に寝てゐる  
魔法の銀の卵である  
懷疑は世界から世界をめぐる  
世界から世界を見出す  
世界から世界を築く  
永遠に新しい世界を開く、真実の魔法の馬である

[×を附す]

二十四日 日曜日

[欄外に記す]  
[(昨年初夏の前案による)]

暗い電燈の下に (それは真夜中)  
一人の陰鬱な男が  
□□□□□□私は私の薄暗い部屋に居て  
われとわが影を  
見たこと、聞いたこと  
そして過ぎ去ったものを追ひかけてゐる  
陰鬱な男は  
□□□□□私は思ひ出し、思ひ出し  
とくと考へて陰鬱になった  
先づと<sup>彼</sup>□私は思った  
事実と幻覚とははっきり区別されなければならない

真実と虚構とは明らかに分たれねばならない  
そうだ、私ははっきりと思ひ出せるような気がする  
まるで人通のない夏の夜の街頭だった  
満月が青く照って居た  
(だのに何と寒々と暗かったことだらう)  
あそこに三人の老人達が居たのだ  
ひからびて、しなびて  
云はば人間の粕のような動いてゐる機械だった  
恐ろしく似たような三人の老人だった  
三人の言葉は柔らかか  
三人の動作は物静か  
三人の心は空っぽに近かった  
だが又三人は一人一人  
全く離れ離れな三人の老人だった  
例へば地に落ちた影のように  
三人は三つながらで一つの塊となつては居たが  
三人は又、例へば丁度その影の本体のように  
一直線の上に全く離れ離れに側を向いてゐた  
たよりない三人の老人は  
たよりない孤独に堪へないから  
互の手を伸ばし  
影のように言葉柔らかく  
涙のように物静かに溶け合つて居たのではなかったか  
それなのに又  
寄り添へば、寄り交れば  
互の姿の中に互の心の見えすくのを何うしようもなく  
寒々と己の愛の消極に苛立ちながら  
互の憎しみを培つてゐたのではなかったか  
確かに  
そんな層のような老年にも憎しみはある  
否、そんな憎しみこそ恐ろしいものではないか  
では、三人の老人のうつろな過去を聞くがいい  
【わしがずっと前田舎に居た頃だった  
それは村の祭りの夜だった  
わしは村一番といふ娘を見たことがあった

わしは全く三尺と隔てない所で其の娘を見たのだ  
わしは娘の小指の先が震へるのまで見る事が出来た  
あかしの光に、その娘が深い目と唇で笑ったのさへわしはこの目で見たのだ  
娘は美しかった  
これは全く本当のことだ】  
第一の老人はそう云って目を細くしたが  
第二の老人はそっとおさへつけるように話し出した  
【だがお前は只目で見ただけだ  
そうだ、これはもうよっぽと前<sup>[ママ]</sup>のことだ  
わしはある木賃宿に宿った時  
そこの若い娘ッ子に呼ばれたことがあった  
それは若くて元気ではちきれそうな娘だった  
その時分はわしも若かった  
わしは若い時には今とはずっと違ってゐたからな  
いや、全くわしが若い時にはこんな風ではなかったからな  
がちりして肉つきがよくて  
肩のあたりは肉で小山のように盛上ってゐた】  
第二の老人の目が追憶の光で輝いた時  
第三の老人は嫉妬をそっと隠さなければならなかった  
【お前達の知ってゐるのはわし達のような人間のことで  
これは今では大分昔のことだが  
わしは天女を此の目で見たことがある  
わしはその天女に導かれて目の眩むような所を歩いたのを覚えてゐる  
そのすばらしい明るさが天女の住む世界だったのか  
それとも天女が居た為に明るくなったのか  
わしはそこをはっきりと覚えては居ないのだが  
気がついた時、わしは電信柱に靠れてゐて  
霞のように消えて居なくなった天女のことを思って居た  
あたりは焼くように暑くて  
昼間の日がわしの顔をまともに照らしてゐた  
わしは生れてからそんなに明るくてそんなに熱くてそんなに気持のいい日を  
その前にもその後にも見たことがない  
わしはその天女を此の目で見てからといふもの  
まるで人間の女をふりむかうとはしなくなった】  
それから三人の老人達は黙って互に言葉を口にしなかった



る。ストリンドベルグの「ユリー」も亦随分長い一幕ではあるが、其上人数も少ないのに、人を引張って居て離さない力がある。どうも戯曲家としてのロランは、ストリンドベルグあたりからは、余程劣って居はしないかと思はれる。まだまだショウの同じように長い一幕「運命の人」も亦、も少し引きしまつて居はしないかと思はれる。

私は昨年十一月末に、ロランの「信仰の悲劇」三部を読んだ時に次のように書いた。(何だか好きになれない。「聖王ルイ」と「アエルト」とは純ではあるが、外見程に裏に力がないように思はれる。幾分若いようでもあり、幾分無理な執拗〔拗〕さといふようなものを感じられる。斯うした根本的な一面をつきつめようとする事は随分、六ヶ敷いことに違ひない。それは彼(ロラン)が唯一のたよりとした理性のみでは、恐らくは成しとげられないのではないかしら。それはもっと全人格的な完成者にのみ出来るのではないかと思はれる。何故なら、徹底的であることが、常に深さと関連するとは思はれないから。そんな訳で、あまりに簡単な徹底には何やら力の空虚が見える。其上これらの戯曲が上演される時は——それは全く正しく、全く善いものであるにせよ——人々をあまりに勞れさせるだらう。)……

そのように「愛と死との戯れ」はあまりに人々を勞らせた。それはロラン自身にこれを否定する自由なり理由なりがあったにした所で、観客のうちで一番忍耐強い人々にとってさへ、これは譬へ堪えおほせたにしろ、確かに重い荷であつたらう。主張の強制が人々を倦ませた。〔科白〕白科の——或は訳語の拙さが耳を勞らせた。

ジェロームの理性主義には、「狼」のチュリエの場合と同じく讚成出来る。だがソフィの最後の行為——或は感情には、と言ふより、その両者の急變的融合には、何やら空虚なものがありはしないか。ストリンドベルグの女が悪の情勢〔性〕に引摺られる場合には、憎悪と憐愍とを通して事実としての意味が含まれる。がソフィの場合には、それは最もくだらない、或は最も力強い(と云ふよりも、何うにもならない)習慣的道德概念的な事実としてか。或は強力な理性乃至意志の具体でなければならない。そしてロランの場合、勿論後者である方が正しく且応はしい。処が如何に正しい理性乃至正義も、感情の肯定を経なければ人格的にはなり得ないことを、或はそのような理性乃至意志によって決断された行為が、感情的な幸福乃至慰安を齎さねば、それはあまりに淋し過ぎることをロランは感じて居るのだ。斯く考へなければ、ソフィの豹變的行為と、其の上での感情の安静とは得られないのである。それならば、此の感情への道程が解釈され、或は暗示されてほしいのである。

そしてもしこれがそのまま、正義への理性への殉教的法悦乃至享樂であるならば、「私、笑っているのかしらん」といったような人道主義と共に、全く私には合はない趣味である。

さて此の戯曲の演出、これは大変なことだつたに相違ない。

ロランと私とはまだ会つたばかりで、既にお別れが近づいて居るらしい。

二十六日

天気は極めて穏かである。

二十七日

今日も亦天気はいい。午まへに小石川へ行く。

二十八日

風が荒れて寒い。午後関口サンが突然見えた。

三十日

曇って暗くて寒くて、雪にでもなるかと思はれたが、晩には雲がどいて無風晴月となる。昼間江波が来て遊んで行ったが、石膏屋から石膏が出来たことをしらせて来たので、夕食後石膏屋へ行き、松平にも持って貰って一緒に江波の処に行き、二つだけ預って貰って一つ持って帰る。

三十一日 日曜日

曇。小冷雨。午後、三沢と村田が来る。

二月

一日

昨日の雨模様は後かたもなく晴れ、冷たい北風が終日吹き廻り吹き荒れる。

二日

晴、風無く閑かに春を偲ばせるようないい日。午後、江波の処へ石膏を取りに行ってくる。

三日

曇り。バラバラ雨一寸。

四日

閑かそうな朝が忽ち曇って、終日明るくならない。午後、青田サンに御見舞ながら行ってくる。<sup>(上原)</sup>王子サンは今日入院した。おぢサンもまだ熱が下らない。

## 五日

晴天, 風, ひどい風, 寒い。夕食後, 三沢の所へ行く。

## 六日

春めいたいい日, 関口サンが来る。晩, 三沢と築地に行く。築地はメーテルリンクの「タンタジールの死」<sup>59)</sup>と「群盲」<sup>60)</sup>

両方共大分前, 五六年か或はもっと前に読んだものだ。「群盲」の方が期待以上に面白かった。「タンタジールの死」では, 五幕目がちょうど期待程位ひ, 四幕目がとんでもなく期待以上によく, 三幕目が期待よりも少しわるく, 二幕目と一幕目とが期待よりも大分つまらなく思った。

〔伊藤嘉朔〕  
キサチャンの舞台も, 「群盲」の方がよかった。

扨て, 自分はメーテルリンクの思想に就いては別段の考を持たない。又メーテルリンクの象徴からは別段に何者をも受けとらない。だから自分は, 全く意味でなく感情としてののみ, そしてその表出としてのみ見る。全く「タンタジールの死」の最後のイグレーヌは, 四幕迄の筋からはなれても, 独立して立派に意味でない, 感情其ものとして働きかける何者かを持って居る。四幕目の女達が, 譬へ女王の侍女でなくて, 三人組の泥棒であった所で, あの位ひ図案的に演出されれば, 立派に何やら音楽的な効果を上げ得るのだ。

又今日の「群盲」にしても——小山内氏の取扱ひ方も正しかった(メーテルリンクに言はせるのではない)とは云へ, メーテルリンクの構成手法は, 正に異常な完璧である——譬へば立体派の画を見るような, 意味ではない重々しいマスを積み上げ盛り上げて, 意味を越えたヒューモアを表出して居る。

そこで, メーテルリンクの「何を」は過去のものとして失はれても, 「如何に」は実に立派に存続されていようである。自分は常々「何を」をより大きく評価するものではあるが, 「如何に」の完璧が, 亦驚くべきものであることを感ずるものである。久しく忘れて居たメーテルリンクが, こんな姿で自分に近づいて来たのは〔意外〕以外である。

## 七日 日曜日

朝のうちに, 川路柳紅氏を尋ねる。暖かい, 静かな, あまりに閑かな, 其故に何か物足りない午後半日を, 弟と二人で何もしないでぶら〜過ごすのを, 何か損をして居るように感じながら, 益々閑かに思った。文チャンが来る。

## 八日

曇日。

世の中には百万の馬があり  
そしてもっともとの馬があった  
古く日毎に<sup>太陽</sup>□□日輪の馬車を曳いた  
ギリシャ神話の駿馬があり  
マセドニアの小アレキザンダーのあばれ馬  
ドン・キホーテの勇ましいおいほれ馬  
佐野源左衛門のやせこけ馬  
ナポレオンの白馬があり  
支那の昔にサイ [塞] 翁の馬  
子供の夢みる大将の馬  
魔法の馬, 感心な馬, 忠義な馬  
可哀そうな馬, 可愛い馬  
馬にはいろいろの種類があり  
そしてもっともとの種類があった  
だが又, 新しい馬を見るがいい  
宿命の不可抗の中に  
蒼ざめた馬を見た詩人が居た  
土色とほのかな緑に埋もれて  
わが影の中にめりこんでゆく  
瘠せて瘠せて  
瘠せこけながら潤けた馬を描いた絵描きが居た  
わかるか  
希望と意志と努力とを信じたい者は  
先づ影を恐れなければならない  
現実を卒直に受入れ又享樂したい者は  
更に現実の中に  
更に現実的な未来の中に  
常に積極的でありたいと希ふ者は  
過去をふりかへってはならない  
あらゆる疑惑に対して目をねむらねばならない  
薄闇と墓と  
そして一切の何やら運命的なるものに対して  
鈍感であり痴愚でなければならない

一切のものの外皮と表面との外  
総べて底なるもの、裏なるもの  
又下積みのものに対して全き無知でなければならない  
ここでは同情は人を臆病にし  
ここでは憐情は人を勞らせ  
ここでは愛情は人を無理性にし  
更にここでは  
ものそれ自身のような客観さへが何やら毒を持つのである

冬、どろんこの中に  
路傍の木柵に、重い荷車に  
前と後とを縛<sup>りつけ</sup>られて  
下を向いて居る馬がある  
だから！  
神経質な人々よ  
神経質な人々は決して馬を見てはいけない

[×を附す]

九日  
晴。午後、江波の所に行ってくる。

十日  
久々で雨だ。この位ひ久しぶりだと、雨も亦格別に悪いものではない。

十一日  
私にここに彼女に就いて話す権利がないにした処で  
今私がここにこっそり彼女に就いて話し出したのは事実であり  
又私はこっそりとでも彼女に就いて話さずには居られない  
彼女！  
彼女は若くて美しい  
彼女は美しくて優しい  
否、譬へそんな風でないにした処で  
彼女は正しく今の今愛される為に生きてゐるのだ  
彼女は毎日毎日  
百万の目の前を

そして百万の彼女に投げられる視線の中を縫って歩いてゐる  
 彼女は毎日毎日  
 それは百万よりも少ないにした処で  
 沢山の知人達友達と  
 行きあひ、会釈し、挨拶し  
 更に其の中に彼女が沢山の失望と沢山の不満とを持つにした処で  
 彼女は又それと同じだけの喜びと又野心とを感ずるにちがひない  
 話したり、笑ったり、それからさよならを云ひ合ったりするだらう  
 更に彼女は毎日毎日  
 もっともっと少ないにした処で  
 更に親しい知人友達、女の、男の友達との間に  
 親しい通信、手紙を受けたり送ったりするだらう  
 彼女がその中に悲しみや、あらうことか怒りをさへ感ずるにした処で  
 彼女がいつも決して決して幸福に又嬉しく思はない筈が無い  
 彼女が私にとってあかの他人であり  
 或はほんの一度、二度、三度  
 それも話ではないような言葉を互にかはし合っただけにした処で  
 彼女！  
 彼女は若くて美しい  
 彼女は美しくて優しい  
 或は譬へ決してそんな風でないにした処で  
 彼女は正しく今の今愛される為に生きてゐるのであり  
 其上彼女の誇は未だ猶厳然と保たれて居り  
 そして又やがて彼女の誇が失はれる時は  
 亡びる為にではなく失はれる時は  
 それが保たれる為に恐れられねばならないし  
 又それが保たれる為に恐れられて居るとは言へ  
 或はそれ自身  
 □□□□□それは又喜びと幸福と共に待たれて居り  
 或はそれ自身待ちきれないで居り、求めて居るのかも知れない  
 三度、彼女は  
 彼女は全く若くて全く優しい  
 其上彼女の誇は未だ猶完全に保たれて居る！  
 そして又やがて彼女の誇が失はれる時は  
 亡びる為にではなく、失はれる時は  
 やがて花さく時は

やがて実る時は  
それは明らかに彼女自身のものであり  
同時にそれは彼女ではない、他の  
今彼女にとってあかの他人であり  
或はほんの一度、二度、三度  
それも話ではないような言葉を互にかはし合った  
彼女ではない、他の一人のものなのである！

[×を附す]

---

(序詩)

さも……………らしく  
さも……………らしく  
さも……………らしく  
それが私の、つまりは虚無の上に踊る  
極めて愉快な  
けれど全く運命的な踊りです

---

三月のような閑かな明るい朝が、一陣の風と重い黒雲とに追はれてから、冷たい二月の風、雨、雪まじめの、ぱら〜と止んだり降ったり、夜は益々風が烈しく寒く

十二日

---

人々は知って居る  
人々は殆どあらゆる限りないことに就いて知ってゐる  
人々はあらゆる存在に就いて知ってゐる  
人々はあらゆる存在に就いて多少とも意義を認め  
人々はあらゆる形式を認め  
人々はあらゆる状態に就いて理解を持つ  
人々はあらゆる在有の常態と変態に就いて  
健康と病患に就てもある程度以上に知ってゐる  
人々は殆ど知り過ぎる程知ってゐる  
人々は一々の結果に就いて知って居り

人々は一々の結果に就いてある程度以上に予測する  
 人々は萬有の現れに就いて知り  
 その意義と又結果とをも見るであらう  
 人々は更に源因に就いても知ることが出来  
 希望と意志と運命と事実とに就いて穿鑿する  
 人々は繁殖とその順序と源因と結果と、更にその意義に就いて  
 人々は衰滅に就いての同じことに就いて知ってゐる  
 人々はそのにおこる限りなく錯綜する偶然と必然との  
 動かすことの出来ない必然に就いて知り  
 人々は殆どあらゆる在る生命に就いてさへうすへ知ってゐる  
 人々はより精神的なるものに就いても  
 その源因と結果と順序に就いて  
 その意義と価値と宿命に就いて  
 更に希望と意志と事実とに就いて  
 そこにおこる限りなく錯雑する偶然と必然との  
 動かすことの出来ない必然に就いて  
 人々は殆どあらゆる限りないことに就いて知って居り  
 「人々は知ってゐる」ことを  
 人々はそれをも知って居る  
 更に人々はけれども亦  
 人々はよく忘れ  
 昨日知ったものを今日忘れ  
 或は全く忘れないまでも偶然  
 或は少くとも、全くよく知ってゐてさへも  
 少くとも忘れたと同じ行為と同じ精神と  
 そして同じ結果とを呼ぶことをも  
 又それに就いての源因と順序と  
 そこにひそむ必然と運命と  
 そして拭ふことの出来ない結果に就いて  
 (それに就いて人々はある程度以上に予測する)  
 人々は  
   或は人々はあまりに多過ぎることに就いて  
 人々は殆どあらゆる限りないことに就いて  
 或は人々はそれがあまりに多過ぎることをさへ  
 人々は知ってゐる

[×を附す]

---

午後、関口さんが来る。関口さんと新井の方に出る。

十三日

天気はおさまったけれども、朝と夜とがひどく冷える。午後、小城サンに行く。文ちゃんと中井の良サンとが出る所だったので、上らないで其まゝ恵比寿の駅まで出、文ちゃんと別れ、良サンとカフェーで一時間余も話して別れる。

十四日 日曜日

朝が曇って幾分暖かかったが、間もなく日が照って益々春めいたが、午後、江波が来てくれて、一緒に三沢を訪ねて夕食を馳走になって、七時に帰る前から雨になって、静かな雨になって、夜は割合に暖かい。

---

〔欄外に記す〕  
〔「炬火」第一号ニ〕

普通には青いと云はれるような  
けれど本当は幾分黄ばんだ緑の  
全く正当に単独な——といふのは  
其の上に木や岩や或は形自身に  
何等附随的なもの——でこぼこを持たない  
立派な丘がある  
何といふことはない  
私は只あてもなく、ふと「馬が」欲しいと思ふ  
すると瘠せても太っても居ない黒の裸馬が  
強ひて云へば幾分瘠せてゐる黒い裸馬が  
何ともない足どりで緑の丘を上るのを私は見る  
なだらかな丘を裸馬は静かに静かに  
強ひて云へば幾分力なげにとことこ上ってゆく  
やがてその  
□□□□黒は丘の頂にまで上って、そっと止る  
幾分黄ばんだ緑の丘に、その単調な頂に  
強ひて云へば瘠せてると云はれるような黒い裸馬がゐる  
私は非常にいやらしいとは思はなかつた迄も  
決して大変にいいとは思はなかつたから  
突然馬は彼方の見えない海に沈んだのか

それとも彼自身の見えない影に消えて居なくなった  
緑の丘は単調な丘に帰った  
それから、何といふことはない  
私はふとあてもなく「木が」あってもいいと思ふ  
すると丘の頂におそろしく丈高い一本の樹が  
普通には青いと云はれるけれど  
これは本当は幾分黒づんだ藍色の樹があった  
恐ろしく丈高いと思った私に幾分の不満があったから  
樹は忽ち低くなったとは云へ  
それは又幾分低過ぎたか  
或はなだらかな緑の丘の頂に幾分強過ぎるようだった  
私は明らかにあまりよくないと思ったとは云へ  
私の不足は黒づんだ樹自身よりも  
樹のとった位置により多くかかはったから  
樹は忽ちにずり落ちて丘の麓に立ち  
半ばに行き  
七合目まで昇り  
更に再び三合目に止まったが  
何故といふことはない  
私の不平は決して絶対には癒えなかった  
私の不平は決して絶対には癒えなかったから  
突然樹は宿命の幕の彼方へ隠れたか  
それとも永遠の涙の中に飛び込んで見えなかった  
私はもうこれ以上を望まない  
私はもうこれ以上何を望もう  
そこに丘がある  
普通には青いと云はれる  
けれど本当は幾分黄ばんだ緑の  
全く正当に単独な  
其の上に木や岩や或は形自身に  
何等の附随的なもの——でこぼこを持たない丘は  
それは立派な丘である<sup>61)</sup>

[×を附す]

十五日

本多正震様

大変に御無沙汰して居る、といったって、僕ばかり詫を云ふ訳ではない。お互様だからな。処で昼間はぼか〜と暖かくなった。一体僕は寒いときたら、虫蛭より嫌ひなのだから、冬といふ冬中は、決して非常に元気のある時など殆どない。だから、動かざること山椒魚の如く、外に出ないこと土籠に似てゐるといって差支ひない。処が夏にでもならうものなら、喜ぶこと働くこと蟻の如く、殆ど弾丸の如き意志と野望と積極とにとらはれる。去年は君の知る如く、東京の冬から忽ち台湾の夏に飛び込んで、帰ってくると又々東京の夏になってゐたといふ訳で、大変に長い夏を持ち、そして仕上げだった。今年とはとてもそうは行かない。だが又春だって、夏程に非常にいいとは云へない迄も、決してひどく悪くはない。

処で其の春が目の前にやって来たらしい。そろ〜元氣を出す用意をしてもいいと思ふ。そしていよ〜春になって最初の襲撃を試みようとする処を——実はひそかに君の処と一人できめて居るのだが、何うだらう。勿論襲撃と云つたって、野猪の如く君に喰つてかからうといふのではない。かと云つて蛭蝮のような陰気な姿でも行けないから、せめては蝶々のように（勿論華かに美しくはなくとも）、快くうかれた心で出かけたと思つて居る。其時には、まあビールでも一本ぬき給へ。呵々呵々。だが其時はまだ〜一寸は来ない。まだ〜春ではない。

ではさよなら

勝手なことばかり喋り過ぎたようだ。君にも<sup>奥</sup>□マダムにも、お変りないことと思ふ。湯地の処では、既に第二世が元氣そうな歓声をオギァオギァ叫んで居るのに、君の所は一体何うなのだ。

空気が乾き過ぎる。喉をやられないように用心し給へ。

それからマダムにも、どうか出来るだけ沢山の「よろしく」を伝えてくれ給へ。

では、さよなら

十六日

天氣が愈々定まると、又々気温がぐっと下つて、其上北風が容赦もなく吹き荒れる。石膏屋が形をとりに来てくれる。

十七日

晴、寒、北風

昨晩はひどい風の寒いのに、築地に行つて来た。「三人姉妹」<sup>(62)</sup>の、これも亦寒い芝居で、益々寒い。

いい芝居なのだが、近頃の自分にはあまり近しくない。例へば、もっとしんみりして

居る時ならばと思はれる、あの豊かなセンチメントが、慰さめのような哀愁のかほりに、半分退屈なあくびを誘ひにくる。それから、例へばあのチェホフの多少の無駄と、そしてせりふのない動きと出入とが、豊かな余韻を示す度に、何処かでもういい加減で沢山と云ふ気がする。チェホフの四幕は、皆、あまりに同じ味なので——それならば「桜の園」が何と言ってもいいようだ。

役者はなか〜楽に、然し一生懸命にやってみる、概して。

朝のうち、今日は小石川へ行ってくる。晩、兄の留守に本田サンが来て十一時まで話してゆく。

#### 十八日

晴れた朝が、たんねんなぼかしのように、だん〜にだん〜に薄陽になり、夕方までかかってやっと一面の曇り空になる。寒くていけない。頭が重くて根気がまるでない。夕方、綾サンが来る。

#### 十九日

#### 二十三日

二十日の午後、鎌倉へ行った。二十一日の日曜日は、すばらしいいい天気なので、午後、昌道をつれて、扇州園<sup>63</sup>に花を見にゆき、二十二日は曇って真暗だったが、午後、湯地を尋ねた所居ないので、帰ってくると湯地に逢ったので、お茶をのみながら暫らく話して、八幡様の方まで一緒に歩いて別れる。其頃から雨になり、夜中かなり降ったようだったが、今日は曇りなりに、朝から雨は止んで居る。夕方東京に帰ってくると、道がわるいのがっかりする。

#### 二十四日

晴、曇、不定、暖い。朝から江波を襲い、ひっぱり出して三越、丸善、松屋と、久々で街中を本石町から新橋まで、ぶら〜当もなく歩いて、夕方帰る。

#### 二十五日

久々に展覧会に出かける。中央美術<sup>64</sup>のと光風会のと。帰ったら文ちゃんが来て居た。

#### 二十六日

天気がいいので、春らしいので、土いぢりなどしてみる。今年の一つ手まはしよく、夏草をやってやらうと思ふ。くだらないものでも、やさしいものを。

二十七日

曇り。兄が帰らないので、小城サンに行ってみたが居ない。夕方まで居て帰ると、雨になる。

二十八日 日曜

天気よく、風冷たく烈し。朝、馬込に佐藤朝山氏のアトリエを尋ねたが、留守なので昼前に辞して、築地のマチネーにゆく。「春のめざめ」<sup>65)</sup>、つまらない。

三月

一日

完全な曇日。風もない。雨も降らない。日も照らない。此の十日程、殊に、毎日朝七時か或は七時十五分も過ぎて起き、夜は一時か或はもっと遅く床につくのだから、何かまとまったものが目に見えてもよさそうなものなのに、さっぱり何もない。

二日

三日

天气がいいので、江波がやって来た。それから、二人で<sup>多磨摩川</sup>□□□□玉川の中井の良サンの処をたづね、夜遅く帰る。

四日

曇日、終日心の中に声が響く、馬鹿げてる、馬鹿げてる、馬鹿げてる。

五日

朝起きると雪が降って居る。けれども十時になっても雪は積まないで、解けて雨樋を伝って流れてゐる。美術院に佐藤朝山氏を尋ね、石膏屋に行つて石膏をとつて来、江波を尋ね、江波と宮田を尋ね、夕方家に帰る。雪はとっくに止んで、道はぬかるんで、ぬかるんできたない。

---

若しも三年前の私だったなら  
こんな風には考へなかつたらう  
彼女はあんまり可愛い  
疑ひの限りない小蟲が咬み汚した此の手で  
彼女の沢々しく柔らかい手を取るには

彼女はあんまり可愛く  
そして私はあんまり、あんまりいけないか  
私はあんまり荒らくれた<sup>〔臆〕</sup>憶病者だ  
或は若しかしたら寧ろあんまり哲学的だ  
何故なら不断の客観は私をあらゆる積極から阻み  
あらゆる現実、あらゆる享樂に対して泥のように鈍く  
殊にあらゆる相対、あらゆる相互なる  
關係に就いての私の疑ひは殆ど限りない恐れである  
私は彼女を限りなく愛して居り  
若しも彼女も亦、快く私に彼女の手を差出した處で  
それだけで二人の愛が完全であり得るだらうか？  
彼女が常に純真であり  
彼女はまことに率直であり  
彼女の行為が<sup>〔ママ〕</sup>逐時に彼女の感情の真であった處で  
そこで彼女が快く私に彼女の手を貸した處で  
其故に彼女は決して私を知らず  
彼女は決して私を理解しないだらう  
そこで彼女に就いての私の考へは  
彼女に堂々と彼の手を差伸べることの出来るものは  
率直に彼自身の力を信ずることの出来る強者か  
或は無鉄砲な馬鹿者か  
或は全く欲望に圧倒された利己人だ  
だが又彼女に就いての私の考へは  
若しも私に於ける如く、より抽象的な  
すなほに愛する心こそ真実にして……  
そして私がこのように彼女を愛して居るのだから  
既に既に彼女は私の心のものであり  
そして恐らくは何等の疑ひを越えて  
私の愛は実に真実であり  
私の彼女に対する愛は実に永遠の彼女に対する愛である  
  
だが恐らくは三年前の私だったなら  
決してこんな風には考へなかっただらう

〔×を附す〕

六日

ひろ〜と薄陽がさして

---

○曇日はありがたい

灰色の  
□□□自分をあらゆる小さな野心からさへ引裂いて了ふ

灰色の空が黙って続くと

誰一人餌を提げて訪ねて来るものがない

ひろひろと吹く風が

静かに自分を闇へと寒さへと押しゆく

一切のまどはしいものが露骨な正体を出して自分を囓ってゐる

何ていふいまいましい曇日だ!

七日 日曜日

雪と雨とがごっちゃになって降ってゐる。夕方には止んだけれど、道は田圃のようなどぶどろだ。

八日

閑かな日だったが、午後曇って、晩方暫らく雨が降った。晩は築地に行く。

九日

朝、文ちゃんが帰って行って、午後、小城のおばさんが来る。

十日

最も馬鹿げたことに就いて書かねばならないことは、最も馬鹿げて居ると同時に、悲しいことである。昨日の午後、火鉢の側で左の目に芥が入って取れないので、久顕に見て貰ふと、一面にぶつぶつがあるといふ。そして夜まで其まゝごろ〜して気がふさいでしまふ。で、いつになく早く床に就いて了ふ。で、今朝は久顕と一緒に家を出て、慶應病院に行つて見て貰ふ。処がひどく待たされた上、明日から当分毎日通はねばならないと告げられる。家に帰ったとて、目は何となくうるさく、其上もっと悪いことに、朝から曇って居た空から冷たい雨が降って、終日ひどく寒くて、何一つする気がしない。炬燵に足をつっこんで居ても、肩の辺がぞくぞく寒くて、其上心と体中とで最も馬鹿げ

て居ることを感じ続けて居る。何ていふ馬鹿げたことだ。

一昨夜、私は築地に行って来た。出物は、ショウの「聖ジョウン」<sup>66)</sup>だった。

ショウ自身はこれに就いて、例のすばらしくいかめしい序文の中で、「これは悲劇であって、メロドラマではない」と云って居る。にも拘らず、これは実に立派なメロドラマである。これが悲劇である理由は、ショウが十分に説明して居る通りであり、これは全くショウが云ふ如く、「悲劇中の高位」にさへ置かれて居るとは云へ、それは厳密な意味でであり、より静観的なる場合に於てであって——一体ショウの如く一面的に独断的に義論する時は、大概のものは彼の思ひ通りに何にでもなるのである。例へば楽観的〔議〕の享楽主義者の悦楽的行為乃至思想も、虚無的悲観主義者の眼鏡には全くたわいのない、或は全く同情せらるべき運命的なるものとして映し出されるといふことは、常にあり得ることである——これが一般観客の間に起すセンセーションは、寧ろより多分にメロドラマチックなものが与へるそれである。だからショウがそう云ふ意味は、「これは今迄ぎらにあった概念的なメロドラマではなくて、メロドラマ以上のものを持ったメロドラマなのだぞ」と云って居るのだと私は思ふ。だがそれがそうであったって、なくったって、私は兎や角云はうとするのではない。私は只「ジョウンが正義の念に燃えた、普通の無垢な人間の為に火焙りにされたのではない故に、彼女の死が数多くの婦女子を焼き殺した東京の大震災のように、何の意義もないのでは無くったって」「ジョウンの様な殺戮が殺人者の手で行はれたのでなくて、人を救ふべき法律が犯した殺戮であり、神を敬ぶ心がなした殺戮であることが、これが悲劇である所以であったって」、私はそのような意味に就いては、別段の興味を持たないのだ。而もこの劇は実に愉快である。而も多分にメロドラマチックなものとして愉快である。にも拘らず、これは又、ショウ自身が殊更否定した如く、實際在来の甘ったるいメロドラマではないのだ。だから例へて言へば、第四場の英軍陣営天幕内に於けるヴォオリク伯、ストガンバー及びゴオシヨンの三人の長い会話の間に、何度か吹呟をするような人々にとっては、これは決して愉快的なメロドラマではないのである。

扱て、演出者としての与志チャンの旗幟は、昨秋イブセンの「社会の敵」以後ひとしほ鮮明したように思はれる。それは或る趣味的な思想的な基準に従った、必然的なデフォーメーションである。それは、「社会の敵」に於ける極めて真面目な思索に並行する、或る諦観的な不真面目さに何処か共通するような、それは「各人各説」(ピランデルロ)に於ける虚無主義乃至懷疑主義の上に発展する、楽観乃至奇形な享楽に何処か共通するような、それは「聖ジョウン」(ショウ)に於ける偶像破壊〔欄外に記す〕〔乃至既成概念破壊〕に何処か共通するような、そして猶も其れらの上にある喜劇味ある積極趣味に共通するようなデフォーメーションである。そして確かに「社会の敵」以後の与志チャンの演出は、

一層自信の強くなったことを認めさせるものであり、そしてはっきりして、そして愉快なものである。

---

目が労れる。目の中で何かがゴロゴロする。根気がなく、思索が永続しない。何にしても馬鹿げてゐる。全く目を患ふと云ふことは、馬鹿げたことである。

十一日

天気晴朗，夜，三沢が来てくれる。

十二日

天気よし。目もごろ〜しない。

十三日

曇って降りそうで，降りそうで降らない。

十四日 日曜日

朝一寸雨が降ったが，ちき止んで，閑かな春日がやってくる。

十五日

今日は医者から，目が全くよくなるからと云ふ理由で，出来得るかぎり，あらゆる仕事から遠のく様に勧告される。殊に夜の読書書物等を全く止められてしまふ。で，ほか〜と暖かい閑かな日を，終日ぶらぶらと馬鹿か何ぞの様に過ぎなければならぬ。全く役にもたたない，馬鹿か白痴でもあるように。

---

[小城]  
すみ子様

最も馬鹿げたことに就いてお話ししなければならないといふことは，最も馬鹿げて居ます。

私は今日で一週間，毎日眼医者に通ったのですが——私の眼はロホーセイケツマクエンなんです——今日私の医者は，私の眼がちっともよくなるないといふ理由で，全くあらゆる仕事を取り上げて了ったのです。第一に，眼を使つてはいけない。第二に眼を使つてはいけない。第三に，そして結局眼を使つてはいけないのです。全く馬鹿げて居ります。一体それで何をして，どんな風に時を費す事が出来ますか，え？ ほか〜と暖かい春日を，私は全く無能な馬鹿か白痴でもあるように，ぶら〜とのらくらと過ぎ

なければならぬのでせうか？ 全くその通り、全く馬鹿げて居ます。頭が馬鹿になりかけて居るから、六ヶしい本を読んでではならぬ。

それならばよくわかって居ます。私は小説か、それも許されないなら、講談本かコックイ本をでもガマンして読むでせう。ですが、字を見てはいけないといふのです。大きな字なら勿論いいでせうが、それだからといって、私に小学校の読本でも読んで居るとでも云ふのでせうか、え？

全く馬鹿げて居ます。いっそのこと、眼が休まる為に、死人のように寝ることが出来ればいいのです。ですが犬かなんぞのように、猫かなんぞのように、ぐうたらぐうたら寝てばかり居られるでせうか、え？ それでなくとも、毎日一—十時間の上も寝てばかり居られるでせうか。

その上起きて居る時でさへ、全くの馬鹿でもあるように、第一に眼を使はないように、第二に眼を使はないように、え？ 全く馬鹿げて居ます。そんな訳で私は決心しました。昼間は何処か気のおけない処に遊びに出かけませう。そして、気のおけない冗談でも云って笑ひませう。明日は江波の処、明後日は三沢の処、明々後日はあなたの処といふようにね。この消時法は、或は成功するかもしれませんよ。そして夕方家に帰ったら、御飯でも食べて豚のようにごろっと寝て了ひませう。え？ 全く馬鹿げて居ます。けれども、どうにもならないのですからね。昨日あなたの処は、大変に賑やかだったそうですね。私は文ちゃんからそんな話を聞いて、ひょっとこんな風に考へましたよ。毎日昼間一番退屈な、どうにもならない時に高ッベでも来てくれて、彼女のお父さんとの限りなき戦争話でもして呉れたら、退屈しないで済むだらうとね。けれども高ッベには、そんな失礼な事を云はない方がいいかも知れませんよ。何故と云って、こんな私の退屈——全く、全く仕事を取り上げられて了って、一日一日を暮さなければならぬといふことは、どんなにつらく情けない事だか——私のような退屈さは、そうならなければ全くわからない事だと思はれますからね、誰だつて却て羨ましがりさへする位ひで、決して同情しては呉れないのですから。え？ 全く馬鹿げて居ます。ですが、私の今日の手紙は、全く馬鹿げた事にかかづらひ過ぎたようですね。ですがもうおしまひにします。此の次の日曜日あたりには、ほんとにあなたの処に出かけて行きますよ。そして、気のおけない冗談でもたらふく云って笑ひますよ。

マツクバカゲテオリマスヨ。

では皆様に、全く誰にでも、私からのよろしくを受け取ってくれる誰にでも、何うか出来るだけ沢山のよろしくを私からとしておつたへ下さい。

何もかもが馬鹿げて見える日

而て恐らくは全く馬鹿げてゐる日

久功

十六日

天気はいいけれども、冷たい北風が荒れまはる。午後、寒いのに江波が来る。で一緒に寒いのに三沢を訪ねる。であんまり寒いのに外出をしたので、晩は咽が痛い。

十七日

天気もいいし、風もあまりないのに、気温は低い。午後、江波の処に一寸行く。

十八日

又々北風が荒れまはって、きちがひのように寒い。毎日毎日何もしないので、馬鹿になったような気がする。その上退屈でいけない。

十九日

私は毎日ここにこうして居るのだが  
私は終日ここに炬燵の中に両脚を突込んで  
きちがひのように寒い北風の荒れる日  
私はここにこうしてじっと目を閉ちてゐる  
私は私のじっと閉ちた目の中に  
炬燵にかけた赤い布団の不規則な<sup>ふく</sup>脹らみを見  
何事もない静かな温もりを感じ  
何事もない終日の閑かな日と  
それに就いての消すことの出来ない不平の中に私は浸ってゐる  
私は毎日ここにこうして居り  
そしてこれが私の生活の総べてであり  
そしてこれが私の馬鹿げた仕事の総べてである  
私の若い医者が——彼は私と私の仕事との相互の關係に就いて何も知る所がない  
永い間の過勞によって損はれた私の目が  
私の目が少しもよくならうとはしないといふ理由で  
私から私の毎日の仕事を全く取り上げ  
私の生活のかはりに終日のこの怠惰を与へたのである  
私は病院から帰ると毎日ここにこうして居り  
私はここにこうしてじっと目を閉ちて居り  
私はここに何事もない閑かな日と  
それに就いての消すことの出来ない不平の中に私は浸って居る  
私は私の若い医者を信用し  
(彼は私と私の仕事との相互の關係に就いては決して知る所がない)

私は私の仕事に罪を被せ  
 仕事に就いての私の執着はごまかされなければならない  
 私の目はやがて十分な休息の後に癒え  
 私の仕事はやがて罪から放たれ  
 仕事に就いての私の執着は十分に主張せられ  
 更に励まされ鞭たれる筈である  
 私は——現代科学文明が育んだ文明人である□□<sup>私は</sup>  
 私はそのような全く当のある希望  
 そのような全く科学的な順序の為に  
 第一に私は私の目を使ってはならない  
 第二に私は私の目を使はないように  
 第三に、そして結局私は私の目を使はない方がいい  
 このような全く医学的な正当な理由の為に  
 私は私の若い医者を信用し  
 私はこのような屈辱的な静かさの中に  
 何事もない閑かな毎日と  
 それに就いての全く堪えられない不平の中に浸りながら  
 私はここにこうしてじっと目を閉ちて居る程  
 そのように恐らくは文明人のあらゆる事物に就いての  
 あらゆる順序に対する理解は実に尊敬すべきであり  
 あらゆる予測に対する確信は正に驚畏すべきである  
 而も更に恐らくは目を病むといふことは  
 もっともっとそれにもまして馬鹿げたことである  
 恐らくはそれは全く馬鹿げたことなのである

〔×を附す〕

---

終日曇って寒くて、晩にはとうとう雨になる。

二十日

昨夜の雨が雪になって積って居る。雪は止まないで降って降って、夕方まで降りつづける。けれど道に暖かいとみえて、以上積まうとはしない。そして暖かいのだらうけれども、決してそう思へる程ではない。反対にひどく寒いので、終日炬達【燵】に入って一歩だつて出ない。退屈は益々堪えられない。夜、中井さんが久々で来たので、つひ夜更かしをしてしまふ。多分目の為には悪かったにちがひない。まったくの所、十二時前には目

がしばしばしてすっかり忘れて居た。

二十一日 日曜日

誠に雪の明日のたわいのない、だらしのない曇天である。寒くて暗くて罪の深い彼岸の仲日である。午後わづかに薄陽がさし、自分は当もなく外に出てしまふ。きたない道をにちゃにちゃ歩いて、結局目黒に行ってみる。

[2頁白紙]

目黒ではおばサンが寝て居て、保ちゃんが退屈しのぎに、鈴木の子供達を相手に雪ぶつけをして居る。保ちゃんと一時間か一時間半話して帰ってくる。急な坂の処で、文チャンと澄チャンに逢ふ。——中井サンは十時頃に憶劫<sup>[億]</sup>そうに帰ってゆく。自分はすぐ寝て了ふ。

二十二日

日本晴れと云へるような朝だったけれども、一寸も霜柱がもち上って冷たい。午後はそれがだんだんに曇って、夕方は蔭鬱など云へるような、情けないような、そして寒い。午後、綾サンが一寸みえる。

---

或夜ひそかな私の部屋で  
私の鼻の先、一寸の所に  
支那水仙の小さな花の四五輪がある  
私の両方の手が胸の上で其の鉢を支へ  
して、私の鼻は幾分強いぐらひ  
その花の  
□□□□ねっとりと、ねっとりと黄色い匂ひをかぐ  
私はそっと眼を閉ぢ  
私の閉ぢた眼の中に、明らかに  
ねっとりと黄色い花の四五輪がある

これは小さな  
けれど  
□□□□そして極めて官能的な部分画だ  
私は目を閉ぢたまま  
私の斜め前の方に  
想像の、もう一枚の鏡を置く

甘くって、甘くって、<sup>何やら</sup>□□□斯う黄色いニガイ——

[×を附す]

### 二十三日

情けなく日がさしたり曇ったりして居たが、<sup>[午カ]</sup>其後には驟雨なんて風変りな雨がバラバラ降り、夕方は又晴れては居たが。

それにしてもひなひなと吹く風、三月も終りの方に近いのに、此の寒さはひどい。毎朝真白に霜がおりて、それは閑かな日ざしにも拘らず、終日馬鹿げて寒い。夕方から文チャンが来る。

### 二十四日

あゝ諸君、何といふ馬鹿げた一週間が続いた事だ。一体いつになったら、此のいやらしい北風がおしまひになるのだ。一体いつになったら、此のしみつたれた北風がおしまひになって、ぬるぬるした南風がやってくるのだ。一体いつになったら、私の目が全く癒えて、思ふ様仕事をする事が出来るのだ。一体いつになったら、せめて此の馬鹿のような怠惰から逃れる事が出来るのだ。そして、赤ん坊のように、八時や九時から寢床に入らないでもいいようになれるのだ。それから何もかもだ。一体何もかも、いつになったらいいのだ。私は気が短いだからな、私は気が短いだからな。

午後、一寸上原サンに行って来る。

### 二十五日

風が吹いて風が吹いて、往来も縁側も空も木も何処でも、鼻の中も耳の中も埃が渦をまき、吹き飛び荒れまはり、たまらない。病院の帰り上野に出、美校の卒業製作の陳列を見、更に江波の処によって夕方帰る。

### 二十六日

気違ひだ。蒼ざめた草色の日が蔭気に照って、北風が荒れて、寒くて黒雲がにわかに天を籠めて、風に乗って雪が渦まき飛んで、忽ち止んで忽ち降<sup>[季カ]</sup>って、寒くって寒くって馬鹿げてゐる。覚えててくれ。私は気が短かいのだ。天候が<sup>[季カ]</sup>気節が正気にかへらないならば、私は決して仕事をしまい。決して何もしまい。

### 二十七日

とうとう風は止んだ。私は晩、久しぶりで築地に出かけた。築地は、はじめての創作物、坪内逍遙氏の「役の行者」<sup>67)</sup>である。だが私は、此の芝居に就いては何と云つたらいいだらう。私は此の芝居を丁度五年程前、丁度ゲーテやヘッベルのものを讀んだ時分

に、それらと一緒に読んだ。私は此の時代風なものを、其の次に現はれた、退屈な写実主義一点張りのものよりも好ましくは思ふ。殊にその中でも、こんな風な幾分怪奇的なものを。けれども亦、其処には何やら被ふことの出来ない時代の間隔がある。例へば「役の行者」には、或る思想的な象徴がある。けれども、そしてそれが理智的には肯定せられないまでも、立派に認知せられるにも拘らず、何処か直接感情に訴へて来ないような所があるのだ。それが芝居そのものの構想乃至表現的な方面から来るのか、或は思想乃至感情的に、実際の時代それ自身の相異とも考へられるべき、全く根本的な所に相違があるのかは解らないが。

兎も角、何かそんな風な隔てを何処にともなく感ずる。或はそこには、或る象徴乃至取扱はれる事件そのものに、何とはない時代的な流行といふようなものがあって、前時代のそれらが私供には何故といふこともなく、興味を与へる力がないといふようなことがあるかも知れない。例へば私供がゲーテの「ファウスト」に全く頭を下げながら、何やら外のを求めずには居られないとか。或は「ファウスト」自身が、私供の前に何やらうすものを纏うてでも居るもののように見えて仕方がないといふような。兎も角、私一個としては、戯曲「役の行者」に対して、何かそんな風なものを感じて居る。乃で、其上小山内氏の此の演出が又、自分には丁度それに似たようなものを感じさせる所の、自然主義風なそれである。[舞台も亦如何にも此の芝居、此の演出とよく歩調の合ったものである。] 乃で私の無難な簡単な評言は、私は此の芝居を大変面白く見た。けれども私のこれに対する興味は、多分に童話劇に対する面白味だった。[役者は一般に、思ったよりずっとよくやって居た。]

二十八日 日曜日

又風だ。だがそれも結構。何故とって、今度来た奴こそは、ぬくぬくとなまぬるい南風なのだ。有難いことだ。これから私は何かかにかするだらう。何かかにか仕事を始めるだらう。午後、目黒に出かけ、晩になって帰る。

二十九日

暖かい。病院の帰り、田辺サンに行つて夕方帰る。十時過ぎには床に入つて了つたが、一時過ぎて保チャンが酔つてやつて来たので、起きて暫らく話して居る。

三十日

晴

三十一日

晴。私達がピクニックを計画した日だ。で、私供、母と私と弟と英子サンの所の総勢

四人とで、十時に渋谷駅に行った。小城サンの女の子が四人、田辺の英サンと英サンの友達と、久顕サンの友達が一人と、江波の処から男の子五人、女の子一人、それにイソチャンとタカザワサンとが集まって、皆で玉川の中井サンの所に出かけた。多摩川原で賑やかな半日を過ぎて、日暮れて渋谷に帰って開散した。後れて兄と本田サンと来たので、総勢二十四五人。帰りの電車などは随分賑かだった。

## 四月

### 一日

今日、私の医者は私に普通に仕事をするを許してくれる。ありがたい。ところで、ぼつぼつ本を読みにかかる。ところが何うだらう。怠惰の惰性だらうか、否全く本当に馬鹿になったのだらう。目は字を見ても頭は意味を受けとらない。だがまあいい。ちきに何もかもよくなるだらう。夕方、本田サンが来る。

### 三日

今日の祭日は、朝から春雨がけぶって、夕方にはあきらかに止んでは居たが、いつ止んだのかわからない。そのこまかく、音もなく降って土にしみいる所は春先らしいけど、これは又あまり立派な春雨ではなかった。何故なら風が北で寒過ぎたから。

### 四日 日曜日

天気になって、午後、三沢が来てくれたので、二人でぶら〜御祖始様<sup>68)</sup>の方まで歩いてみる。

### 五日

三年振り位ひで出科が来る。

### 七日

午後、江波が来、後、文ちゃんが来る。

### 八日

かよが突然帰ってしまったので、今晚から英子サンの所に宿りにゆく。

### 九日

病院の帰り三沢を尋ね、三沢と江波の所にゆく。風が強く、気違ひのような風が吹き、白い埃、乾いた埃が街を流れ、家の中にまでたまる。だが寒くない。ちっとも寒くない

から、我慢してやる。

#### 十日

曇、雨、止む、午後、夕方、鎌倉に行ったが、皆サン留守だった。十一日の夕方、皆サン帰られた。十一日は、曇って風が寒かった。十二日はいい天気。但し、風はひどい。夕方東京に帰って来る。

#### 十三日

晴、但し馬鹿のように寒し。ところで昨晚は、例によって英子サンの処に行って十時半頃かに寝たのだが、二時頃騒々しい電報の声で起こされる。これは又、大変な電報で、窓から兄と中井の良サンと後藤とが飛びこみ、附録にビール壺が半打。三時半に兄が寝、夜明になって良サンが寝たので、自分と後藤とは家に帰って朝食を食べたといふ始末。グロテスクでたまただから愉快だが、なかへ手きびしい。良サンと後藤とは、朝のうち早く帰る。

さて、何日の間、何と何もしないことでせう。うちでは、ね、兄が兄がでせう、それから引越す引越す、ね、それから私は二三日、胃の腑が重たくていけないのですよ。今日近所にお恰好な家があったのでね、多分近いうちにそこに越すことになるでせうよ。それにしたって、私は何かかにかしたってかまはない筈ですが、それがまあ漫然と落ちつかないとても云ふのでせうね。困ったものですよ、ヘッヘッ、ですが明日か明後日にでも、石膏屋が来てくれるといいのですがね。又新しいアイデアでもやって来るかも知れやしませんからね。

---

お天気がいいのは大変にいいことですね

ですが気まぐれに寒いのは極、いけませんね

私は昨日鎌倉の庭で——明るい昼前でした

可愛らしい黄蝶がアネモネの花の中に飛びまはるのを見たのですがね

え、目の下の町には桜の花が真白に咲いて居ましたし

え、遠い海に波の立つのがそれは静かでしたよ

え、風のひどい日には硝子戸の中が一番です

ところが東京の今日ときたら

東京にはあひにく硝子戸がないのでせう

春先の真昼間障子をしめる気にはなれませんからね

少々寝不足の所へもってきて

まあ、空気がぞくぞくと寒いのですからね

え、空には雲もないのですがね

え、心の隅に春らしい期待が吹雪をして居るのですがね

え、気まぐれに寒いときたら極、いけませんね

え、瞬間といふ奴は私達の気持に対して何て直接的なのでせう

え、ですが又、永遠といふ奴は何て漫然と私達をゆすぶり通して片時もかたくなに

死なうとはしないのでせう

え、それから死

ですがそれらは私達からあんまり遠いと云へば云へますがね

ですがまだ絶対って云ふ奴がありますね

それから意味

それから運命——（嫌なこと）

それから罪

それから懷疑、懷疑

私達の有頂天から忘却までの間には

何てぐじゃ〜と色んな馬鹿げたものが充ちてることでせう

弱々しい、はっきりしない

云はば、遠くて近いような

全く間接的な為により直接的なものよりも、一層直接的であるような

そんなにまどろこしい故に苛々と堪えられない

何て漠然と

何てかたくなに、決して片時も死なうとはしない——

ね、何やらこんなものに似通った<sup>ところがある</sup>□□□□□□

ね、だから春先の気まぐれに寒いときたら極いけませんよ

#### 十四日

風が気違ひじみて 午後、江波が兄弟で来たので、一緒に原瀬の奥サンの処につきあふ。綾サンが見える。

#### 十五日

風は吹きつゝ<sup>（マカ）</sup>け、北風の極寒い奴だ。

昼前に笹塚に行き、昼食後、良サンと後藤と三人で横浜に行った処、昨日一昨日の風でだらう、急にサイベリア丸の入港が延びた掲示が出て居る。ひっこみが見つからないといふ形で三人で東京に帰ったが、そのまゝ銀座に出て夕食をとり、寒いのにぶら〜歩い

て日本橋まで行って寿司をつま<sup>〔みか〕</sup>り、神田駅から電車に乗って帰る。新宿で後藤と別れ、良サンを引張って帰る。

#### 十六日

四時に起きて、良サンと出かけ、新宿で後藤と彦サン、惣チャン達と逢って、横浜にゆく。十時に昇<sup>〔山口〕</sup>サン、宇多<sup>〔山口〕</sup>チャンをとりまいて笹塚に帰り、忽ち祝杯兼昼食、自分は三時頃、家に帰って来る。

すっかり道がかわききってしまった所へ、いつまでも風がやまないで、目がつかれていけない。

#### 十七日

新橋演舞場<sup>69)</sup>に東踊を見にゆく。

#### 十八日 日曜日

三沢を尋ね、神宮青年会館に郷土舞踊を見るつもりで出かけたが、招待券でなければ入れないので、止むを得ず、新宿で鉢を買って三沢の処へ舞ひ戻ったら、ちきに村田がやって来たので、夕方迄遊んで帰ってくる。暖か、朝から曇って居たのが、パラパラ雨になったり止んだり、夜は風がすさまじい程。

---

何にもしないんですよ、え、全く何にもしないんですよ。一体私はどっちかと云へば、何かかにかしたい方なんですがね。まあ、少し極端に云ふなら、して居たいといふよりも、為らないでは居られないといふような性なんですがね。

で私は此の怠惰を一重に「落着かない」に帰さうと思ふのですよ。ほらね、引越す、引越すでせう。それから、兄が、兄がでせう。石膏屋は来てくれませんしね。私は今では、斯う何かしらん、東のようになって私に立衝いて居るものと、根気勝負をしてでも居るように、自分を思っているのですよ。

#### 十九日

今日は十九日でせう。で、また別段これといふ程のこともしないのですよ。尤も今日は音枝が来てくれて、英子さんの所に宿りに行ってくれたので、夜はたっぷり時間がありましたよ。で、ね、私の予測の通り、少しばかりいいアイデアがやって来てくれましたよ。仕事も少しはやりましたよ。ですが、まだ――思ふ存分といふ所にはなかなかゆきませんよ。其上この景気は、まあ云はば途中の小山か、一寸した見晴しのようなものだって

ことがよくわかって居るのですからね。何故と云って、引越は二十二三日に迫ってるのですからね。明日あたりから、いやでもぼつぼつ仕度にかからなければなりませんもの。

北風で北風で、日はよく照るのですがね。どうも気持よく暖かいとは云へません。

二十日

風。気違ひ。馬鹿。

二十一日

二十二日

引越す。

二十三日

落着かない。

二十四日

春雨。暗くて静か過ぎる午後。

午後、動坂に石膏屋に行ってくる。石膏屋は二十七日に来るだらう。それから、江波の所に一寸寄り、夕方築地にゆく。久しぶりだ。

〔欄外に記す〕  
〔直チャンのマスク夫人はすばらしい出来だった〕

出物はカアル・シュテルンハイムの「ホオゼ」<sup>70)</sup>。感激から遠のいた自分には、斯んな皮肉がお誂へ向きだ。馬鹿げて居て愉快だ。伝統のマスクをかけ、「程度」の埒内に居ながら許される程の機会を捕へ、許される程の享楽に対しては、此上もなく貪欲なマスクが馬鹿にされながら、実際的には一番利巧な道を歩んで居るかに見えながら、矢ッ張り馬鹿にしか思はれない所に喜劇がある。マスク夫人に至っては、その平凡さに於て実に実際そのものの如しだ。ここに流れる何やらナイヒリスチックなものは、ピランデルロあたりから思ふと、幾分外面的で、幾分必然さに於て欠けるものがある。テーマを組立ててゐる所の組材にも亦幾分の不満がある。だが又芸術の為の芸術を大道とするならば、この劇には一寸の無駄がなく、人を退屈させない点に於ても一貫してゐる。マスク夫妻、ドイツア、スカロン、ムンデルシュタム、どいつもこいつもエレメントとしては、実にあくどい程のタイプに底してゐる。〔微妙〕この点では、この作者もなか〜意地悪く、なか〜峻烈だ。それなのに、この「ホーゼ」はどうもあまり立派な上等品とは云へない。と云ふのが、これが芸術の為の芸術に傾いてゐる如く——芸術の為の芸術としては、このテーマはあまり応はしくないようである——ここにある皮肉は、幾分皮肉の為の皮肉過ぎるかもしれない。だが、まあ、それだっていい。演出は愉快であり、役者は粒が揃って上出来だ。幾分外面的過ぎた処で、台詞はコッケイで役者は慣れきってゐる。観客

は沢山居て、ゲラゲラ笑ふ。幾分甘くみられたにした処で、腹を立てる程のことはない。自分の隣りに腰かけた若い女さへ、ゲラゲラ笑って居たもの。それにしても、幾分物足らなくもあり、幾分癪にも障る。だがこいつはどうも材料から来るらしい。

〔欄外に記す〕  
〔直チャンのマスク夫人はすばらしい出来だった〕

#### 二十五日 日曜日

どうもいけない。曇って、寒くって、暗くって。夜になって、篠つくような驟雨がやってくる。

#### 二十六日

明るい青空と、墨のような雪と、凍えるような空気と、篠突く雨と重吹きと、嵐風と電と入と月光とが別々に、又一緒に入れ乱れて気違ひのような終日が過ぎる。今日は家で薩摩寿司をつけたので、江波と本田サンとが来て、十二時まで賑やかに笑ふ。

#### 二十七日

天候は快復したが、五月が来るといふのに、寒くていけない。〔同〕午後、石膏屋が来てくれる。植木屋も今日で仕事を終ったし、そろゝ―落着いてくれないでは、苛々していけない。夜、田辺サンが来て下さる。

#### 二十九日

終日雨が降ったり止んだりして、寒くて堪えられない。

私はいぶかる

〔欄外に記す〕  
〔炬火第二号二〕

若しも彼女が遂に彼女の□□抽象でないならば  
何故なら私は常にそして斯くも彼女を愛して居り  
私は他の少女、具体の彼女を決して知るよしが無い  
とは云へ私は嘗ていくたりかの少女と親しみ  
或は今、現に私の周囲にいくたりかの少女を私は持つ  
私はそれら幾たりかの現実の少女を  
或る時、又別の時に愛し親しんだらう  
〔ママ〕  
□□更に而も私はいぶかる  
若しも彼女が遂に彼女の□□抽象でないならば  
何故なら私はその時にも又他の時にも  
私は決して偶然の彼女に満足することがないだらう

少女の或者は私にとって並ぶものなき天使であり

又<sup>他の外の</sup>  
□□□□□次の少女は私にとって純真な獣であり

更に外の少女等は一々それらの中間に別々の存在でありながらも

あゝ、決して決して偶然を越えず

あゝ、具体の彼女は実に斯くも私にとってはあかの他人である

あゝ、<sup>あゝ</sup>  
□□それならば私が常にそして斯くも愛してゐる彼女が……

あゝ、私はいぶかる

若しも彼女が遂に彼女の<sup>観念</sup>□□抽象でないならば

[×を附す]

私は寒くていけないといふ。それが私のロマンティズムでない証拠には、諸君、ではラヂオの天気予報を聞き給へ。「明日はよいお天気になるでせうが、気温は下って、朝は降霜を見るでせう。」全く馬鹿げて居ますよ。五月が目の前に来てゐるといふのにね。佑サンが今日帰って来たが、疲れてゐるから来ないといってくる。

三十日

天候は全く<sup>[回]</sup>快復して、風も強くない。午後、三沢が来てくれる。夕方三沢と神田に出、神田で夕食をとって上野広小路の寄席に行く。元来私は寄席なる所に行ったことがない。それは小供の時分、三番町の寄席に素人のお伽芝居、猿蟹合戦だとか、桃太郎とか云ふものがかかると行ったことがあるが——普通の寄席に行ったのは、実に驚くべきことに今日がはじめてなのだ。それでさへ、三沢が引張って行かなければ、行きはしなかつたらう。寄席では、五人会と称して、市馬、小三治、貞山、小勝、三梧楼といふ顔ぶれだったが、小勝、三梧楼が来ないので、途中で紙切の玉之助、講釈の玉浦などが出しゃばって待たせたので、最後の二人を聞かないで外に出、久々で上野の夜をぶら〜して遅く家に帰ってくる。

五月

一日

天候、好もし。江波を誘ひ学校に三沢を尋ねて、聖徳太子奉讃美術展覧会<sup>71)</sup>を見、江波の所で夕食を食べ、三人で銀座を歩き、十一時過ぎて帰る。

二日 日曜日

午後、三沢と村田とがやって来る。夕方まで麻雀をやる。夜、久顕と新井の方に出、

十一時半頃帰って来る。

[欄外に記す]  
[炬火第二号ニ]

私の周囲に深々と霧が籠め  
私は霧の中に居る  
霧  
不思議に甘い柔らかい霧  
私は霧の中に人生を見る  
そこに人生は朧ろげな対象の影を映し  
それは永世の有目的——力の光の本体であり  
或はそれがさもあるべきロマンスであったところで  
私はその影の中に人生を見る  
そこに希望の影像があり  
諸君実に人生は霧の中に在るようだ  
諸君がそこに蒙<sup>〔朦〕</sup>朧たる影——夢を見るならば  
諸君は明らかにそれを信任すべきであり  
諸君は正しくそれに信頼していいのである  
何故と云って霧はやがて晴れ  
そこに彼方に諸君の彼方前方に地平線がある  
それは明らかな一線であり  
それは正しく只々諸君の彼方前方の一線である  
諸君が一步進めば一步退くであらうし  
諸君が十歩近寄れば丁度十歩だけ遠のくであらうところの  
それは現実の無とも云ふべき只一線である  
幸にして諸君と又私の前に深々と霧が籠め  
霧の中に蒙<sup>〔朦〕</sup>朧たる影——希望があるならば  
あゝ、それこそは実に非現実の有である

[×を附す]

三日

朝の間に石膏屋まで行って来る。午後、再び出かけて三沢を尋ね、借りるものを借りてくる。

## 四日

保ちゃんが来る。

## 五日

曇天、小雨。朝のうち、ヴィルドラック夫妻<sup>[招]</sup>将来の仏国美術を見に、日米ビルディングに行く。デルスニスのと違って数が少なくて、会場が静かだから気持ちいい。

コローの静かな農村風景の前で、中年の画家が水彩で小さな然し念入りな模写をして居る。コロー、クールベ、モンチセリーのいい画が来てゐるが、自分にはやかり現代の<sup>[はカ]</sup>ものの方が興味がある。マチスは数葉のデッサンの外に、大きい油が一枚来てゐるが、あまりよいものではない。ルノアールも数葉来て居るが、感心しない。ピサロも小さな二枚で、前に見たいくつかに遠く及ばない。ローランサンの三枚、少女半身、殊に紅帽の少女が惱ましくも可憐だ。それからデュフィの大きな水彩が四五枚、海辺展望などいい。スゴンザックの一枚は取立てる処はないが、不思議な味がある。それからボンナールの<sup>[ママ]</sup>四点がある。ボンナールといふ人は実にうまい。庭園などはすばらしく美しい。だがやっぱり自分が肩を持ちたいのは、デュフィーの水彩とローランサンだ。

## 六日

曇。

〔欄外に記す〕  
[炬火三号]

元来私の室は大変に小さい  
それは決してお客様を迎へるようには出来て居ない  
嘘を云へば室中に広がってゐる大きな机が一つあり  
それが嘘である証拠には  
まだまだ雑多な本がぎっしりつまって  
あふれてたまって汚れてゐる本箱があり  
別に小さい机が一つあり  
三尺五寸の彫刻台が一つあり  
そして私の為の肘つきの籐椅子が一つある  
それから油土の箱が一つあり  
古びたバスケットが一つあり  
その他に小さな机の上に、大きな机の上に  
石膏の又青銅の二十余の彫刻があり  
木彫の又土製の人形がいくつかあり

壺があり、パイプがあり  
があり、があり、があり  
あまつさへ  
鴨居の上には剥出しのキャンパスのいくつか  
油絵と写真版の入った額縁のいくつか  
更にいくつか、いくつか、いくつか  
こまこました私の全所有物が  
かくも不可思議に  
よくもきっぱりと余地もな<sup>くつまって居る</sup>□□□□□□い  
〔機〕  
気嫌のいい時には  
私は終日此処に居て私は頗る上<sup>〔機〕</sup>気嫌である  
私は遅々として倦まず本を読み  
字引の頁をひっくりかへし、ひっくりかへし  
私は絵具箱を引出して  
キャンパスの上に慰み多く私の幻像を追ひかける  
更に私は油土を取って  
思ひのままに数々の胸像裸胴を刻み  
ペンを取っては本の裏表紙に、そこらの紙片に  
とりとめもない無駄を丹念に書き綴る  
更に私は終日ここに居て  
言葉なき陶磁器か又可憐な花草を愛で  
黙々として私の人形達  
グロテスク  
□□□□□□奇怪な蕃人人形に煙草の煙を恵んでやる  
私は終日此処に居り  
そうして、そうして、そうして  
私は終日此処に居て、私は頗る上<sup>〔機〕</sup>気嫌である  
〔機〕  
気嫌の悪い時には  
私は終日此処に居て、私は頗る<sup>〔機〕</sup>気嫌が悪い  
私は黙りこくって  
私は煙草をふかし、私は煙草をふかし  
煙草の煙はもくもくと脂臭い臭ひに渦巻き  
目の心がじっと痛み  
頭がくら〜と重たい  
すると悩ましさが、悩ましさが……  
馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿

私は日記帖を取りだし  
 日附の下に馬鹿，馬鹿，馬鹿，馬鹿と私は書く  
 荷が重過ぎる時，私は笑ふ  
 気取った風で，私はパリアッチか何かを思ひ出し  
 いがらっぽい声を張っておどけた唄を私は歌ふ  
 私は終日此処に居り  
 不気嫌〔機〕は私をたわいのない反抗者に見立てる  
 ところで，これが私の生活であり，仕事であり  
 此処に私の室の中に  
 私の仕事，私の生活は多く尽きるようである  
 ヘッ，ヘッ<sup>72)</sup>

[×を附す]

#### 七日

雨，降ったり止んだり，風生温く烈し。神楽坂のオザワで，夕方から炬火の人達の会があったので出かける。十六七人の人々が集った。誰も彼も始めて逢ふ人ばかりなので，誰もかれも一人も殆どおぼえないでしまふ。

#### 八日

天気頗るよし。築地のマチネーを見にゆく。出物はマーレイの「長男の権利」<sup>73)</sup>とイーツの「砂時計」<sup>74)</sup>。両方とも読んで居なかったのだが，築地がはじめてアイルランド物を出すので出かけたのだが，両方とも別段の魅力がない。

砂時計の方は，〔場〕登上人物を全部マスクで，舞台，衣装，動作すべて人形の意気で変ったものではあったが，それにしても別段の魅力がない。

#### 九日 日曜日

天気頗るよし。朝，馬込村に佐藤朝山氏を尋ねたが，御留守なので，動坂まで石膏屋にゆき石膏をとって，午に江波の処にゆく。夕方までぐづ〜して，夜は江波と二人で築地にゆく。

築地の出物は，ヴィルドラックの「ミシェル・オオクレル」<sup>75)</sup>。遅れて行ったので，第一幕を見ない。第二幕から見たのだが。正直なところ，期待ほど大きなものではなかった。ヴィルドラックの評判は大分聞いてゐる。それは，あながちヴィルドラックが今日本に来てゐるからばかりではない。一月余も前，巴里から柳沢健氏は，大いに感激した通信を送って来てゐる（読売新聞）。そして実際フランスでも，ヴィルドラックは随分評判があるらしい。私はその評判から，或るチェエホフの或るもの，四幕物と関係の，



十三日

馬鹿のように寒い。冬のように寒い。嘘じゃない。ひどく寒い。

十四日

ひどく寒い。曇っててひどく寒い。

兄があんまり音沙汰ないし、文ちゃんが悪いように聞いたので、小城サンに行ってくる。文ちゃんは、何だか訳もなく元気がなくて寝て居るし、兄は十一日から音沙汰ないとの事で、鎌倉に電報を打って置いたら、家に帰ったら、兄からの電報で、兄も亦鎌倉で身を悪くして居るらしい。

十五日

曇りも幾分うすらいだし、寒さも幾分うすらいだ。

十六日 日曜日

一昨日約束して置いたので、<sup>〔小城〕</sup>増子と<sup>〔小城〕</sup>元子とが、私の処に遊びにやって来た。午後、増子は、私の為に半日モデルになってくれる。夕方、増子と元子とを恵比寿の駅まで送って帰り、夜は佑サンの処へ行く。

十七日

江波を訪ね、一緒に仏蘭西美術展覧会を見る。

十八日

夕食後、三沢を尋ねたら、丁度村田が来て居て、散歩するといふので、三人で神田をぶら〜歩く。

十九日

佑サンの処から夕食によばれて、薩摩寿司の御馳走になる

二十日

雨。

二十二日

雨。

### 二十三日 日曜日

昨夜は雨の中を、夜中になって保ちゃんがやって来て、暫らく話して居るうちに、三時になってしまった。今朝は、雨はまだ止まない。午後やっと雨は止んだ。だがまだ――怪しげな空模様だ。

### 二十四日

朝のうち、一寸江波の所に行つて来る。折角止んで居た雨が、夕方から又降り出し、雷が鳴る。

### 二十五日

天気はどうかかうにか直つた。朝から、形式ばかりの結納を持って目黒にゆく。

### 二十六日

天気、漸くよし。

### 二十七日

午後、江波と三沢が来たので、高円寺の向ふの方にスケッチに出かける。夜

### 二十八日

随分家に居た。毎日毎日油絵をかいたり、小さなものを作ったり、本を読んだりしては居るけれども、それは私の勉強といふよりは、私の慰めだ。で、それには訳があるので、つまりその例によって、兄が、兄が、なので、つまりその、犬の声が遠くでしても、猫は何やら不安を感じないように、兄弟だから、つまりその、それが又例によって解剖することも出来ない複雑（親）な、雑多なものが混沌と入乱れて、つまりその何処かで物足りない、落ち着かない、落ち着かないといふような、漠然とした脅迫となって、つきまとして離れようとはしないのだ。だから今日は、長いことほったらかして置いた、築地に行く気になつたのだ。レオ・トルストイ。どうも親しみのない名だ。「闇の力」<sup>76)</sup>。どうもあまり引力を感じない。大分前、本で読んだ時にも――どうも私はその頃から、トルストイには親しみを感ぜなかつた。築地に行ったら、五時から開いて居たので、丁度序幕の幕切前から見た。

二幕――三幕――四幕――暗くって、長くって、力がなくって――（露骨な現実には私に別段の興味を与へてはくれない――それも舞台での現実、町の角で見ると合ひよりも力がないものだ）――それに薄田君<sup>77)</sup>のニキータは（序幕の終の方。私の見た辺は大変よかったので、一寸元気づいて二幕を見出したのだが）次から次へと、概念的な愁歎場を開<sup>転</sup>展してゆくので――つまり私は第二幕、第四幕一場、第五幕一場といふよ

うな舞台現実が嫌ひなので、四幕第二場のアニユートカとミートリッチの芝居、あんな風な意気だといふと思ふ。

二人の芝居はなか〜よかった。ひどく遅くなりそうなので、最後の場を見ないで帰ってくる。長くて、力がなくて

二十九日

雨。

三十日 日曜日

午後、雨は止んだが、道は悪く雲が多い。夕方、中井サンが来たが、兄がいないので、夕食後一緒に花や何かを買ひに銀座、新宿を歩く。帰って、良サンがブケーを造ってくれて、一時過ぎて床に就いたら、兄が帰って来た。

三十一日

今日が、兄の結婚なのですよ。で、朝九時に皆で、三光教会<sup>78)</sup>に行くと、直ぐに式がはじまり

六月

一日

どんよりと終日曇って、ひよ〜と寒い。

---

雨の日は続き、雨の日は続き  
東の間の弱い日ざしの後に  
曇日が続く、曇日が続く  
東の間の微風のために  
雨が降り雨が降り、雨の日が続く  
そんな風に私の意志が曇り  
青葉のながめは私に退屈なばかり  
時色の花の誘惑も瞬時を越えない  
思想の慰めも永く続かない  
思索の興とても魅力がない  
それ故に懐かしい幻影よ  
処が幻影は私に乏しいのではなくて

否、幻影は多過ぎる  
今私の周囲に幻影は多過ぎる  
それ故に意志は曇り、意志は曇り  
私は独りぼっちで（もっとやれ、道化者め）  
ぶざまな三竦みの為體だ  
欲望の三羽の小鳥を皆逃がして了ふ  
最も馬鹿げた獵師が  
両手に持ちきれない三つの菓子に苛立つ  
たわいのない赤ン坊のように  
意志は曇り、意志は曇り  
青葉のながめに退屈し  
時色の花の誘惑に飽き  
思想の慰めに満ち足らず  
思索の興にも引かれない  
雨の日の、雨の日の  
東の間の日差しの後の  
曇日の、曇日の  
東の間の微風の後の  
雨の降る、雨の降る  
ひとりぼっちの私の（道化者め）  
幻影と幻影と欲望の前の  
意志が曇り、意志が曇り  
ぶざまな三竦みの為體だ

二日

どうにかかうにか晴れて、どうにかかうにか晴れてゐる。が六月になっても寒くていけない。

夜、新井の方に散歩。

---

彼女は私を愛してくれる  
だが婚姻を結ぼうとはしない  
私は彼女を或はもっと愛し  
而し決して婚姻を結ぼうとは思はない  
彼女は私の彼方に居り

私は彼女の此方に居る  
若しもここに婚姻が結ばれるなら  
彼女は私の連鎖となり  
私は彼女の一部となるだらう  
彼女は私を愛さなくなり  
彼女は私を愛さないで、私に頼るようになるだらう  
私は彼女を愛さなくなり  
私は最早彼女を愛するのではなくて  
彼女に対する私の感謝は  
毎日の手足に対する如くであらう  
ところでここに多少の疑ひかロマンティシズムがあるにしたって無いにしたって  
ここに多少の誇大かスピリチュアリズムがあるにしたって無いにしたって  
それよりも露骨に負惜しみか<sup>ひがみ</sup>僻がさへあるにしたって無いにしたって  
恐らくこいつは真実の影法師位ひではあるでせうよ  
ヘッ ヘッ

### 三日

天気がいいのに、寒くていけない。夕方から雨。

### 五日

天気もどうやら。午後、青山会館に活動写真を見にゆく。そこに、いそちゃんが居て、一緒に見てくれたので、兎も角もしまひまで見て、夕方帰って来る。

〔松村〕  
いそ子様

だから！ 私は一人で活動写真を見にゆかない理由がわかったような気がするのです。  
だから？ 何だから、何故だから？ 実はあるよりはっきりとはわからないのですがね。  
ヂヂヂヂ……真暗になる。私は、あゝ暗くなったと思ふ。パッと写真が写る。私はあゝ、  
パッと思ふ。それから場面がパッパッとかはる。私の目がパッパッとする。それが、胸  
の辺からおなかの辺に伝はって、体中がパッパッとする。慣れないから(?)でせうか。  
私は丹念にタイトルまで一々読まうとしてゐるのですね。すると、行儀よく列んだ横文  
字が、行儀よく列んだまゝ、ブル……ブルブル……ブル。すると私の心がブル……ブル  
ブル。体中がブルブルです。もう何としても仕方ありません。スワンソンもブルブル、  
コーリアもブルブル。だから私は、譬へばクスグリ泣き(そんなものがあるかないかは  
知りませんが——おかしさと情無さとが一緒になって、顔が歪んでくるのです。人は泣  
いてると見るかも知れませんが、自分では笑ってるといった方が当てると思ふので

すが。

あれから少しばかり、物足りなかったのでせうね、電車通りに出て——何しろ、喉が乾いてみましたからね、お茶を一つ飲みませうと思ったのですが、これはまあ止めました。築地に行ってやろう。私は勢よく猿江行の電車に飛び乗らうとして、あやうく乗りませんでした。そうだ。おとなしく帰らう。そこでおとなしく中野に帰って来ました。ら、中井の良サンが来てみました。一緒に夕食を食べて、十時半まで話してみました。中井サンが帰ったら、まだ何かしてもいいような気がして、丁度雑誌屋がアトリエを置いて行ったので、太子展の批評を二三読んでみたのですが。まだ丁度あなたに一筆お礼を書く位ひの時間があると思って、これを書き出しました。書いてみると、又々何時の間にかグロテスクです。ですが、かまはないでせう。何故と云って、普通の事なら、他の人々が書くでせうからね。丁度一年と一ヶ月目の今日、活動写真を見ました。また来年の今頃にでも見ることになりますかな。

築地に行きませんか。マチネーはチャペクのロボット<sup>79)</sup>。夜はカイザーの朝から夜中までをやっている筈ですが。昼も夜も面白いと思ひますが、あなたの御都合から云へば、昼の方がいいでせう。

今十二時三分過ぎです。今頃あなたはお家へ帰って、三十分かそこらお家の方々に今日のお話をして、今しがたお床に就いて目をつぶって、睡眠前の幻覚の中に今の今、スワンソンかコーリアの影法師でも見ておいでかと思ひます。では、おやすみなさい。タカザワサンにお会ひの節は、何卒よろしく。

それからもう一つ、あなたやすみ子が髪を上げた姿には、私はどうも<sup>〔贊〕</sup>讃成出来ませんね。ではおやすみなさい。

高円寺爺

六日 日曜日

江波がわざー花札を持ってやってくる。で弟と三人で三年ひいて、夕方から三人で銀座に出る。生ビールがやたらとうまい。

七日

晴、少しづゝ暖かい。有がたい。

夕方、東中野に岩村を尋ねたら、丁度出がけだったので、新宿まで一緒に出、新宿でわかれて、油粕だの鉢などかって帰ってくる。

八日

九日

両三日天気よく、暑くなって来た。

築地に行ってくる。「朝から夜中まで」<sup>80)</sup>。「ミシェルオークレール」「闇の力」の後の「朝から夜中まで」だ。私は喜んで行ったのだ。そしてその通り、嬉しかった。

舞台はこまこました所をのぞいては、大体に於て前の通りで、効果から云っても別段の差異はない。だが又、もと――立派な舞台だ、何処を変へる必要があるだらう。

演出も亦別段の変りがない。只、主役を今度は、丸山氏がやったので、演出者も幾分手心をしたらうし、効果も亦幾分ちがって居た。前には千田氏の一人舞台のようだったのが、今度はまとまった全体の芝居になって居る。此の前は、全体が幾分ばらばらで――併し稽古が充分だったので、演出者の企図はこまかい所まで行とどいては居たが――千田氏だけがずぬけて居て、そして一貫して居た。今度のは、丸山氏が一人特に目立つといふようなことがなく、全体がなめらかに、外面的にも亦内面的にも幾分平易になって居る。で、茲でそれだから、主役の丸山氏は千田氏にひどく劣って居ただらうか？ 確かに劣って居た。だが、此の舞台と此の演出とが丸山氏をして、或程度まで千田氏の形の中で芝居をしなければならぬようにしたといふような窮屈さがあったかも知れない。だが又それ以上に、今日の丸山氏は可哀そうな程咽喉をいためて居た。セリフがまるで出なかった。丸山氏はもっとも味の出る人だ。

他の全体は、今度の方がよくいて居た。場から場へのつなぎも、エフェクトもうまくいて居た。一場一場の空気はあまり変って居なかった。出納係の家の場は、前の方が面白くいてみたように思ふ。プランは変らないのだから、岸氏よりも山本氏の方がよかったかも知れない。救世軍の会堂では、前の山本氏のがあまり器用過ぎて――うまいといふ点ではうまかったのかも知れないが、空気にはいやみな処があった。私の趣味から云ふと、救世軍の会堂の空気は、今度の方が好きだった。

十日

晴。有難いことに、益々暑い。

夏が来る

そして私は一人でにこにこ喜んで居る

私は暑いのが好きだ

私は明るい日の下で葉鶏頭のじわしわと赤いのが好きだ

私は机に向って座って居り

私の膚に快い汗が渲んで居る

私の肌に快い汗が渲み

私は快い汗を一人でにこにこ喜んで居る

雀等は木の蔭に口をあいて羽を垂れ

朝顔の葉は日なたでちぢくれて居る  
私の体中に汗が渲んで居るのを感じ  
汗は私を静かな瞑目に導いてくれる  
私は遠い山の夏を思ひ  
私は遠い山を被ふ雲を恋しむ  
私は彼方の海を見  
私は波に照る強い日を夢みる  
きらきらと焼ける砂が私の足裏を焦し<sup>あなうら</sup>  
私の目はむくむくと厚い雲に暈する  
私の肌にじっと汗が渲み  
熱い風が南の方から吹いてくる  
蝉の音がする  
蝉の音が猶も私を駆って懐郷にやる  
息をきって喘いで居る犬は何と可愛いか  
埃を浴びた都会の夏の  
埃を浴びた雅楓の街路樹の<sup>たうかへで</sup>  
日なかの電車の乾いた軌みの<sup>軌</sup>  
それらが集って夏の日なかのダルなものうさを醸し  
それらが寄って夢みる夏の過剰な情熱を鬱積する  
驟雨が来そうで、驟雨が来そうで  
遂に来ないでしまった時  
私の肌にじとじとと流れたくて流れない汗は  
目の縁に渲む汗は  
口髯の中に溜る汗は、胸板に<sup>渲む</sup>□□しみる汗は  
それを静かに感じ静かに堪へ  
それを静かに楽しむ私は  
真昼  
私は真紅に焼けるカンナと共に  
私は猩々緋に輝くサルヴィアと共に  
私は蒲色に爛れる毒百合と共に  
私は黒い情熱、充ち満ちて動かない情熱を  
私は夏の中の夏、焰の中の焰を  
私は黙って、黙って動かないで  
私は立派な忍従の中に  
私は立派に積極的に

私は血を以て堪へ、私は火となって燃えるのだ  
 私は誇の中の誇をほこり  
 喜びの中の喜びが私を有頂天にする  
 私を有頂天にする  
 夏が来る！<sup>81)</sup>

---

鎌倉から電報が来る 「ヘイタイウマレタ 〔柴山昌生〕 マサキ」 お目出度う！

十一日

なか〜暑くなる。日中は九十度にもなる。元気が出てくる。  
 夕方、本田サンが兄に至急の書信をもって来たので、夕食後、目黒に行ってくる。

十二日

朝から情けない冷たい風が吹いたが、曇って、雷が鳴って、雨になって、終日寒くて情ない。

十三日 日曜日

曇り、小雨、雨、寒い。

十二時二十五分に尾張町に着いたら、三分と待たないで、いそちゃんが来た。一緒に直ぐ築地のマチネーを見に行く。チャペリの「人造人間」(R・U・R)——〔型〕典型的なメロドラマだ。二年前の演出から思ふと格段だ。勿論、以前の時でさへ、練習は随分とつまれたし、築地の出発を飾るに耻ぢないものではあったが、今から思ふと役者がまづかった。それよりも、意気が合はないような所があった。それは、役者ばかりではない、総べての舞台及舞台裏が如何にも手いっぱいだった。だが今では、此の位ひの演出では劇場のどの一部だつてまごつかない。役者はラクになり、しぐさは大きく自由になり、そこにはユーモアが軽々と醸され、メロドラマはここにその本然の境地を十分に獲得してゆく。これを大げさに云ふなら、前のは無から産み出された有として、その努力、その効果は或はより大きく見つもらるにしても、今日の完成は又、実に悦ばれていい筈だ。  
〔吉田謙吉〕  
 謙ちゃんの舞台も、立派なものだ。

少しばかり雨が降って来たが、いそちゃんと銀座をぶら〜歩き、千疋屋でお茶を飲んで、新橋で別れて帰って来ると、夕方から雨がひどくなった。

十四日

雨。朝から小石川へ行つて、四時頃に帰ってくる。

---

私の部屋がひどく静かだ  
梅雨の日の日暮前の私の部屋が  
薄暗い此処に空色のほのかな花が  
細々とたよりない花茎の頂上に  
針のように細い弱々しい葉の上に  
空色のニゲラの花がふる――と小さく震へて  
暗くて、哀れっぽくて、ひどく静かだ  
硝子戸の外に風が少しばかり  
何処となくあたりに雨だれの音が少しばかり  
其故に此処、私の部屋が益々静かだ  
机に倒れてゐる大きなパイプの  
幅広いニッケルの帯がうすく曇つてゐる  
風が少しばかり  
雨だれの音が少しばかり  
そうして此処、私の部屋がひどく静かだ  
だから  
外の風が嵐となって樹々をうならせ  
雨だれが雷を呼んで天に轟かせたら  
そうしたら此の静けさは  
消え入るかとも心細く静けを<sup>〔ママ〕</sup>深めるだらう  
そうしたら私の心臓は  
消え入る静けさに溶けて泣き出すだらう  
此処に空色のほのかな花がふるへ  
机に倒れた大きなパイプが一つ  
硝子戸の外に風が少しばかり  
雨だれの音が少しばかり  
静けさが消え入るばかり静かに深むのを待って  
静けさに溶けて泣き出しそうな  
梅雨の日の日暮前の私の部屋が  
暗くて、哀れっぽくて  
暗くて、哀れっぽくて  
暗くて、哀れっぽくて……

十五日

<sup>〔回〕</sup>  
天気快復，無事，無為。

十六日

天気好けれど，気温低し。朝，佑サンが艦に帰る前に，一寸寄ってゆく。夕食後，三沢を尋ねたが，留守だったので，ちきに帰って来る。

十七日

晩，三沢が来てくれる。

十九日

昨日は暫らくで江波をたづねたが，<sup>〔緒〕</sup>一処に銀座に出たら，偶然中井の良サンに逢ひ，遅くまでビールを飲んで，自分は江波の処に行って宿ってしまった。今日，昼に家に帰ると，青田の<sup>〔幸吾〕</sup>小父様が来て居られる。夕方，築地に行ったが，与志チャンも，梅サンも来て居ないので，又芝居を見て待って居たが終に来ず，空しく帰って来る。

二十日 日曜日

田辺サンが来られる。夜，雨になる。

二十一日

曇。<sup>〔周〕〔記〕</sup>築地小劇場の二週年記念の内祝に招かれて居たので，鶴見の花月園<sup>〔2〕</sup>にゆく。いづにもなく，馬に乗ったり，オモチャの汽車に乗ったり，つり橋を渡って見たり，スベリ台でスベって見たり，まあ何かにかこちょ〜手を出してみたりして，半日遊ぶ。

二十二日

晴れたり曇ったり。どうも暑くならない。昼間から，ひよ〜と風が冷たい。夕方，後藤が来てくれたが，例によって兄が帰って来て居ないので，一緒に夕食をすませてから，目黒に行って来る。

二十三日

まあまあ何て云ふ日でせう。曇ってひよひよして，大学から母に呼出が来る。□□□で，母が午後行って見ると，例によって，兄が，兄がなのでせう。目黒に電報を打って帰って来たといふのです。久頭と空っぽの様な心で，夕方散歩して，ビールを飲んで帰って来たのですが，兄は帰って居ないのでせう。だから又々電報を打って，床に就いて，まじ〜して居たのですが，一時になって兄が帰って来ましたので，皆で四時までも起きて

居てしまったのです。

#### 二十四日

晴，曇，半ば。ちっとも暑くならうとはしない。私は終日室に居て，可哀さうに障子〔始〕を立てきって居る仕末だ。

#### 二十五日

天気よし。午後，石膏屋が来てくれる。

〔欄外に記す〕  
〔炬火4号〕

彼は踊り，そうして彼は踊り続ける  
彼の踏む一足は何と悲壯〔壯〕にして壮重  
彼の胴体に何と生气と力とが流れ  
その瞳に時に燃える歡喜  
その鼻は多分並びなき倨傲の為に美々しく尖り  
或時そのうなじに淀むのは限りない哀愁である  
そうして彼は踊り，そうして彼は踊り続ける  
彼は常によく踊り，そうして常によく動く  
けれども彼は又稀に暫らく動かない  
けれどもそれは又分秒を出でないだらう  
それは多分二つのものを一つにつなぐ間奏であり  
それは多分新らしく生れる為の前奏でなければならない  
多分彼の瞳に泪が輝く時があるだらう  
多分彼の鼻柱が苦痛に歪む時があるだらう  
而も多分彼は踊り，そうして彼は踊り続けるだらう  
多分彼は進む為にはなくて，ただ――行く為に踊るらしい  
或時彼の一足一足の足どりは，沈み行く宿命の深淵に向ひ  
時から時へと彼の頑丈な二つの握拳は  
単純な運命にあらゆる反抗を敢てして  
復〔複〕雑にして混沌，意味を超えて最も必然なる宿命を発いてゆく  
そこに宿命の庭に立派に積極の家が築かれる  
そのようにして彼は踊り，そうして彼は踊り続ける  
そうして彼は最後に遂に止まるだらう  
彼は最後に止まり，そうして彼は動かないだらう

彼は決して最早動かない，最早決して動かない彼は  
多分それは有ったものの総和であり  
多分それは道程の最後の結晶である筈だ  
結末は常に動かないように  
動かない所に常に結末がある  
それは総和であって而も価値を失った殻であり  
それは結晶であって既に形から離れた無である  
而も彼が踊った踊りは  
彼がそれを踊ったが故に何等かではあり得ただらう  
多分それは「紀念」のような何等かではあり得ただらう

二十六日

曇。晩，雨になる。

二十七日

天候快復<sup>(四)</sup>，快晴，いよー暑くなって来た。有がたいことに，夏らしく暑くなって来た。まだ雲はあまり輝かないけれど，空の青が深くなって来た。夕食後，江波を尋ねたが，あひにく留守だったので，すぐに帰って来る。晩，兄夫妻<sup>(83)</sup>が帰ってくる。一緒に保ちゃんも来たが，保ちゃんは十一時過ぎに帰ってゆく。

二十八日

午後，小さな雨になり，だんーひどく，夕方から本降りになる。

二十九日

天気よく風よし。午後，三沢が来てくれる。夕方，三沢を送りながら，其辺を一時間ほど歩いてくる。午後，暗くなり，真暗になり，夜，雨になる。

三十日

雨，いやな雨。午後，遠山サンをお訪ねする。小城サンにも暫らく寄って，夕方帰って来ると，恵比寿で武サンに会い，誘はれるまゝに銀座まで出て，一緒に料理屋<sup>(食カ)</sup>で夕事をして終電車で帰って来る。

## 七月

### 三日

一昨日午後、鎌倉に行った。それは祖母〔柴山琴子〕様の五年の忌日だったからだ。天気は晴れて、暑かった。昨日午後、昌生叔父様が帰られたので、帰京をのぼし、今日は天気がよかったので、朝のうち、綾子をつれて浜に行ってみた。気の早い連中が少しばかり海に入って居た。晚九時四分の汽車で帰る。汽車で本田の叔母様<sup>84)</sup>にお逢ひして、一緒に東京に帰って来る。

今日は、江波が来てくれたそうだ。

### 四日

にえきらないいやな雨だったが、思ひきって——明日から暫らく家に居たいので——江波を尋ねる。朝から行って、夕方まで居て——別段の用もなかったのだが、一緒に出ようといふので——夕方にはひどい風が吹いて居たので、傘が折れそうだった——が、兎も角、銀座まで出てビールを飲んで、遅く帰る。帰りに東京駅で、人形座<sup>85)</sup>の連中、伊藤〔熹明〕のきさちゃん、奥さん、〔千田是也〕囀さん、小松栄、小代等々に逢ひ——電車が故障があったので、皆で品川の方をまはって、山ノ手で帰ってくる。新宿で岩村夫婦に逢ふ。

### 五日

曇り。パラパラ雨。寒い。

### 六日

晴，曇。夕食後，上原サンに行ってくる

[4頁白紙]